平成二十七年度　第百十五回

京都大学書道部

初夏書展

日時　平成二十七年　六月六日・七日
十時～十七時（七日は受付十六時まで）

会場　建仁寺　西来院・禅居庵

―巻頭に寄せて―

2 年前の 6 月。試験期間前の景気づけをする大学生よろしく、梅雨入りを前にありったけの力で照り付ける太陽のもと、私は静かに息を呑みました。建仁寺に堂々と並ぶ書作品の数々と、陽気で親しみやすい先輩方の、初めて見る真剣な表情。歳の差以上に、大人びて見えたのは、きっと私だけではなかったはずです。

あれから 2 年。桜もとうに散り果て、緑ますます深まるこの季節が、またやってきました。

京都大学書道部の書展は、今回で 115 回目を迎えます。部の活動を象徴する書展には、現部員や OB・OG、そして多くのお客様の色々な「想い」が時を超えて詰め込まれている――このことを胸に刻みながら、部員として、部長として時を重ねてきました。

部長になってからの 1 年は、まさに光陰矢の如し、瞬く間に過ぎ去っていきました。伝統と信頼に対する責任と、それ故のかつてない充実感とに彩られた日々に、私は様々な思いを巡らせました。達成感に浸るときばかりではなく、自分の弱さ、至らなさに思い悩むときも少なくなかったと思います。

そんなときに、私をそばで助け、私の励みに、希望になってくれたのが、同じ幹部回生の仲間たちでした。自らの任を全うしながら、役職の垣根を越えて助け合い、折に触れて私の背中を押してくれた彼らに、いつしか私はかつての先輩方に似た頼もしさを感じていたのでした。

決して平坦な道のりではありませんでしたが、多くの方々のご助力を賜りまして、長きにわたる伝統と「想い」を受け継ぐこの場所へたどり着くことができました。日頃からご指導いただいている技術顧問の寺本蒼玄先生や顧問の阿辻哲次先生をはじめ、ご支援・ご協力いただいた関係者の方々には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

本日はご多用の中、第 115 回京都大学書道部初夏書展にご来場いただき誠にありがとうございます。全力で駆け抜けた幹部回生と、それを後押しし、ついてきてくれた部員全員の想いの結晶は、今年もまた、抜けるような青空のもと燦然と輝くことでしょう。どうぞ皆様、心ゆくまでごゆっくりご高覧ください。

平成 27 年 6 月吉日

京都大学書道部　部長　宗哲仁

阿辻 哲次（京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授）

かき氷のおいしい季節になった。

いま使われている常用漢字の「氷」は、本来「冰」と書かれた字の俗字で、「冰」は《冫》と《水》を組みあわせた会意字である。そのヘンとなっている《冫》、すなわちニスイ偏は、水が凍った時に表面にできる、ひきつったような形をかたどった文字で、それが点一つに省略され、場所がすこし移動した結果「氷」となった。

今のように高品質のアイスクリームが出回る前には、子供が真夏にもっとも喜んで食べたものはかき氷だった。そのかき氷とて、真夏でも簡単に氷が作られるようになった近代の産物で、以前は夏に氷を食べるなどまず考えられなかった。しかしずっと昔の中国では、真夏に皇帝が氷を群臣に分けあたえるという、驚くべき儀式があった。

種明かしは簡単で、冬の間に小川のほとりなどにできた氷を、山奥の洞窟などに作った氷室に貯蔵するのである。こうしておけば夏まで氷を保存できる。皇帝は夏にそれを取り寄せて家臣に配っただけなのだが、この行為を通じて、皇帝は自分が宇宙の時間を支配していることを家臣たちに見せつけた。酷暑の時節に氷が配られるのを見た家来たちは、皇帝の絶大なる能力に心酔したはずである。

権力者とは昔から、ささいなトリックによって、偉大な能力をもつと見せかけるものなのだ。自由な学風を標榜する本学の者が決して忘れてはいけない事実である。

作品制作について（一）

寺本 蒼玄（京都大学書道部 技術顧問）

先ず最初は楷書の作品について、説明してみましょう。

楷書とは、漢字の正体のことで、正書、真書とも言われています。楷書が見られだした頃は、現在の楷書は今隷とか楷隷と言われ、楷書とは八分（隷書）のことであったと言われています。

初期の楷書と言われている魏の鍾繇の薦季直表や宣示表は、隷書のように扁平な形で行書のような省略の技法も使われており、接筆を空けて明るく穏やかな作品となっています。その後、東晋の王羲之の楽毅論等の晋唐小楷に変化、又、北魏の時代には北の造像記、南の摩崖の碑が生まれ、方筆形と円筆形に進化します。そして隋の墓誌銘の出現により、正方形に直線的な線になっていきます。唐代に入り、初唐の三大家（歐陽詢、虞世南、褚遂良）により、バランスの良い形を確立します。その後、現在の活字（明朝体）の原型となった顔真卿が肉太の堂々とした楷書を発表します。

楷書を学ぶには、色々な起筆（露鋒、蔵鋒、逆入等）や用筆（背勢、向勢）、線の太細等を学び表現することであります。

使用する筆は、直線的な作品はやや硬めの兼毫がよく、曲線的な作品には柔毫が使い易いと思います。用紙はあまり滲みが多くないものが良く、墨色は濃い方が良いと思います。ただ、楷書作品は、文字の形、バランス、線の統一感等が大切で、観る人がその良し悪しを判断し易いので、臨書作品よりも、創作の方が難しいと言われています。

皆さんも、よく臨書をし、学習した上で、創作に挑戦してみてください。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の初夏書展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について



『篆書』
漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。



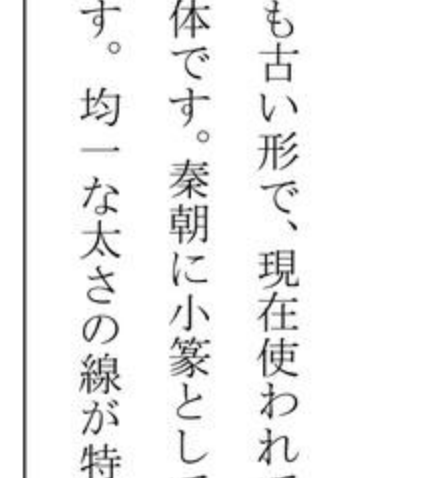
『隷書』
役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



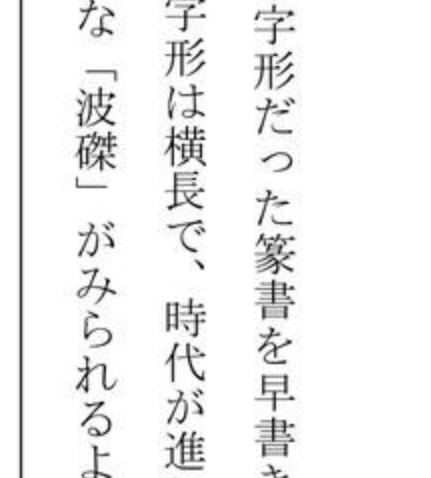
『楷書』
隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



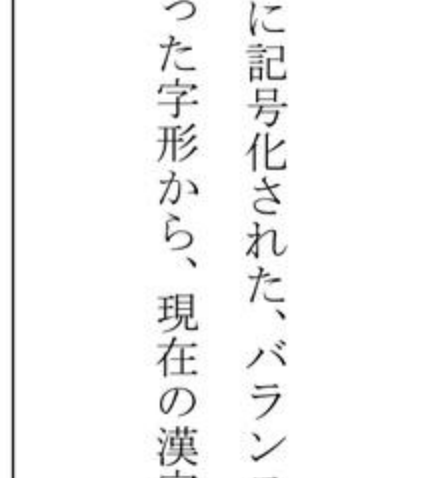
『行書』
隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



『草書』
隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。



『かな』
日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。



『調和体』
日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。

作品一覧

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『荷香隨酒杯』……p10
　　創作・『無欲速』……p10

二回生

笠原知生　臨書・『史晨碑』……p18
木下有羽　臨書・最澄『最澄將來越州碌』……p12
清水麻友美　臨書・鄭簠『隷書浣谿紗詞軸』……p30
下坂桃代　臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……p20
　　創作・『春の苑』……p30
立田俊也　臨書・黄道周『七言律詩幅』……p12
深谷拓未　創作・『楓橋夜泊』……p32
堀場菜摘　臨書・近衛家熙『高泉和尚碑』……p22
眞嶋優一　創作・『よのなかの』……p33
三村祐貴子　創作・『王粲詩』……p14
宮部大志　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……p33
矢野凱己　臨書・『高貞碑』……p23
　　創作・『ありあけの』……p34
山口和樹　臨書・趙之謙『齋民要術』……p23
山崎夏野　臨書・『木簡』……p31
山科直也　臨書・李邕『李思訓碑』……p35
渡辺顕　臨書・褚遂良『文皇哀冊』……p24

三回生

新井一矢　臨書・『蘇孝慈墓誌銘』……p15
荒巻拓哉　臨書・王羲之『秋月帖』・王鐸『臨秋月帖』……p26
　　臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……p26
石川敬一　臨書・『想狂女百萬』……p26
上西隆太　臨書・王鐸『臨柳公權帖』……p11
　　創作・『楊基詩』……p27
牛山泰喜　臨書・『木簡』……p17
上井晴仁　臨書・文徵明『行書詩巻』……p17
閻姝恒　創作・『水調歌頭』……p27
　　創作・『酔人腸』……p17
釜阪紘平　臨書・『牛橛造像記』……p11
藏岡凌平　創作・『薤露青』……p27
　　創作・『萌黄網脚猪口』……p28
篠原理那　創作・『慧眼―西田幾多郎の言葉―』……p19
　　創作・『絶句四首―夏―』……p28
島津七明　創作・『ふるさと』……p19
白谷暢浩　創作・『翔破』……p29
　　臨書・聖武天皇『雑集』……p19
宗哲仁　臨書・良寛『天気稍和調』……p20
　　創作・『帰去来』……p31
　　臨書・張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』……p21
武田桃子　創作・『長安道』……p20
　　臨書・伝紀貫之『高野切第三種』……p21

徳川鈴奈　創作・『司空図「江行」』……p13
疋田研一郎　創作・『啾啾詩』……p13
古川智大　臨書・良寛『心水何澄々』……p32
寶官紗紀　臨書・楊沂孫『八言對聯』……p22
山﨑絢香　臨書・小野道風『屏風土代』……p32
　　臨書・傅山『草書五言律詩軸』……p15
吉村友希　臨書・褚遂良『雁塔聖教序』……p35
　　創作・『嘩彼小星維參與昴』……p35
　　臨書・文徴明『細楷落花詩巻』……p36
　　創作・『夏は来ぬ』……p23

四回生

稲葉由花利　臨書・趙之謙『張衡靈憲』……p16
上村耕平　臨書・顔真卿『顔勤礼碑』……p17
片野裕太　臨書・傅山『瑤華一片七言詩軸』……p18
河合翼　創作・『陶淵明　飲酒其一「衰榮無定在」より』p28
小島健史　創作・『驚天動地』……p29
中谷百花　臨書・呉昌碩『行書題沈寐叟海日樓圖詩軸』…p21
中野綾香　臨書・伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』……p31
松澤祐実　臨書・趙孟頫『玄妙観重修三門記』……p22
宮下拓也　臨書・佐久間象山『七言絶句』……p33
家倉凌　臨書・『石鼓文』……p14
　　臨書・『筆林』……p34

修士一回生

伊東優治　創作・『一条摂政集より』……p16
大泉陽輔　臨書・何紹基『臨張遷碑』……p18
川上澄香　創作・『清露』……p18
小松聡子　臨書・『一字蓮台法華経神力品』……p29
鈴木貴也　臨書・沈周『次韻東園菊花詩』……p31
渡辺健介　臨書・伝紀貫之『寸松庵色紙』……p24

合作

矢野凱己・山口和樹
　『一逢』……p24
上西隆太・篠原理那・宗哲仁・吉村友希
　『駆け抜けて』……p25
一回生合作　『力を合わせて』……p25
二回生合作　『学生川柳グランプリ』……p25
三回生合作　『軌跡』……p36
全体合作　『七夕の願い事』……p25

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生



『荷香隨酒杯』

「荷香酒杯に隨う」

荷香は蓮の葉や花の香り。清末何紹基の風で明るく爽やかに表現しました。

○西来院作品



『無欲速』　論語

「速やかなるを欲する無れ」

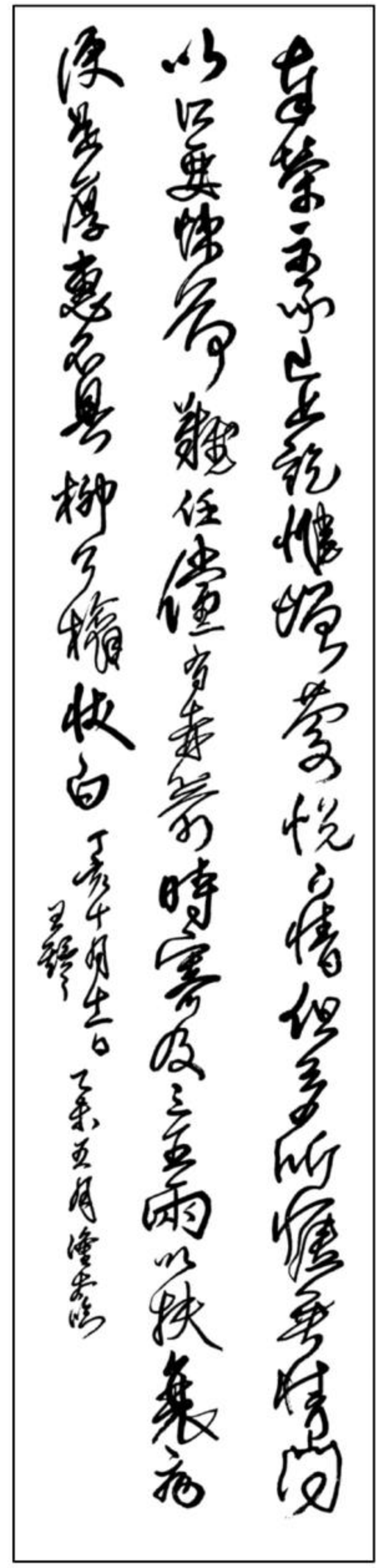
事は、いたずらに急いではならない。清末趙之謙の風で力強くすっきり仕上げました。

○禅居庵作品

○西来院

1

上西隆太　三回生
臨書　草書　王鐸『臨柳公權帖』　二尺×八尺



「奉榮示承已上訖惟增慶悦下情但多欣愜垂情問以所要悚荷難任儻有赤箭時寄及三五兩以扶衰病便是厚惠不具柳公權狀白丁亥十月十一日王鐸」

書けば書くほど感じる王鐸の書の偉大さ。少しでもその多くを吸収し、表現することを目指しました。

2

角谷遊野　三回生
臨書　楷書　『牛橛造像記』　二尺×八尺

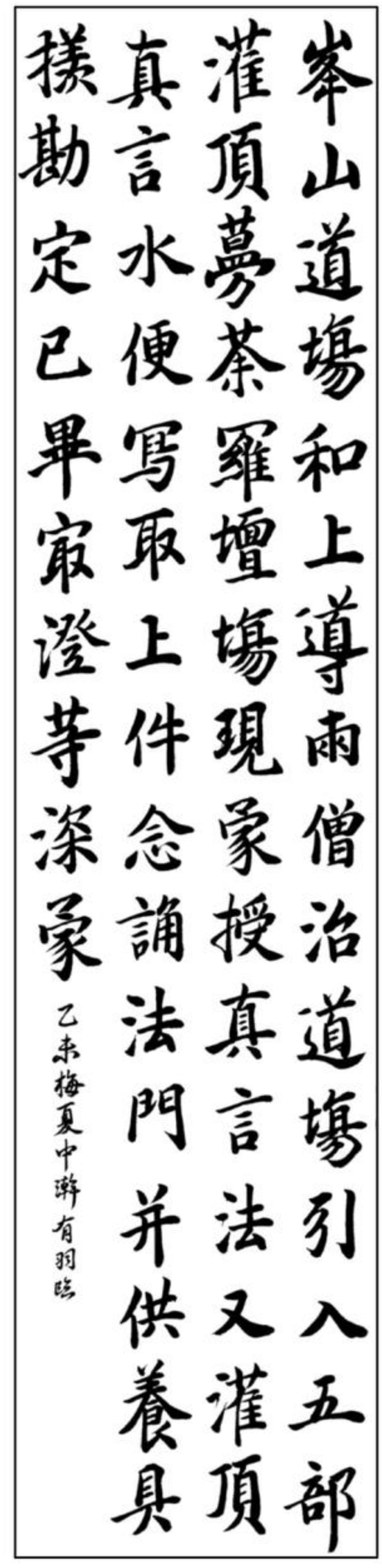


「天井諸仏之所。若生世界。妙楽自在之處。即令解脱。三塗悪道。永絶因趣。一切衆生。咸蒙斯福。」

造像記は豪放な力強い書体が魅力です。しかしこれは石に彫られた碑文なので、毛筆で完璧に再現するには無理があり、独特の運筆法をもってその「雰囲気」を抽出することになりますが、ここに書く人の個性や趣味が入り込んできます。今回は造像記の鋭さを強く残しつつ、毛筆特有の粗さや大らかさを備えた文字を目指しました。

3

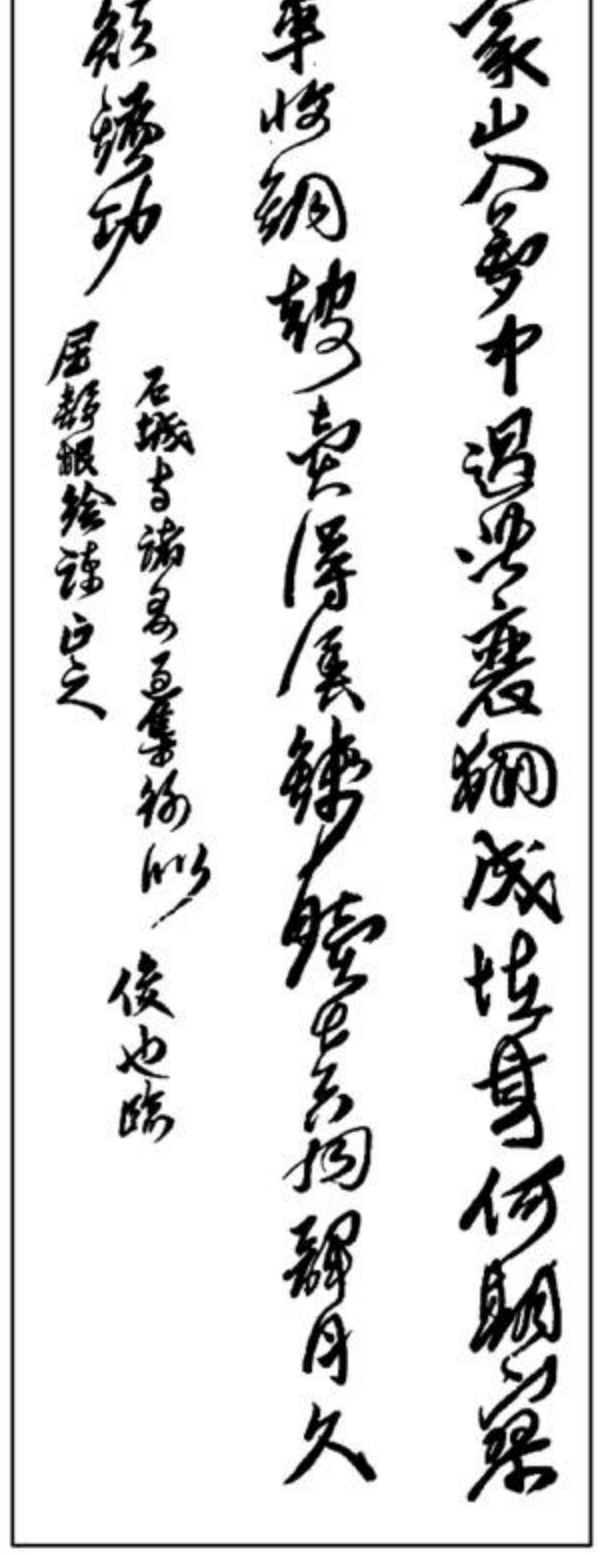
木下有羽　二回生
臨書　行書　最澄　『最澄將來越州碌』　二尺×八尺



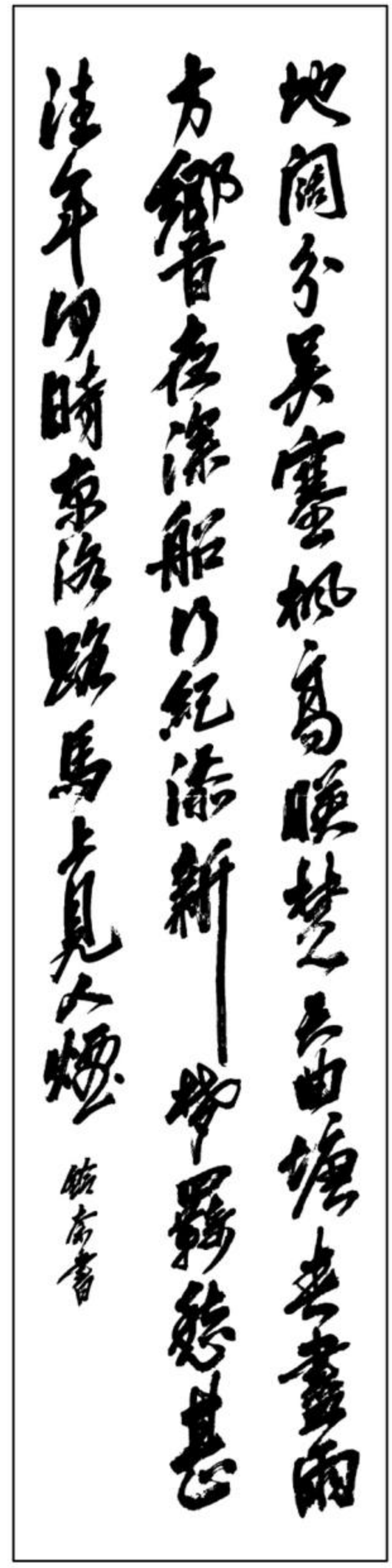
「峯山道場和上導兩僧治道場列入五部灌頂蔓荼羅壇場現象授真言法。又灌頂真言水。便寫取上件念誦法門并供養具様。勘定已畢。最澄の書の一つ一つの線は柔らかく、かつ全体ではすっきりとした印象を与える書風に惹かれて、最澄の將來越州碌を臨書しました。最澄の書の流麗さを表現できていれば幸いです。」

4

立田俊也　二回生
臨書　草書　黄道周『七言律詩幅』　二尺×八尺



「蘭春木…諫正之」
二行目の一番上の文字に惹かれてこの法帖を選びました。いざ書き始めると、一行目がなかなか最後の文字まで入りきらず、一行目が一番難しいことに気が付きました。


地闊分吳塞楓高映楚天曲塘春盡雨方響夜深船行紀添新夢羈愁甚往年何時京洛路馬上見人煙
方鄉書夜深船行紀添新夢羈愁甚往年何時京洛路馬上見人煙
注年何時京洛路馬上見人煙
鉢齋書

5

徳川鈴奈　三回生

創作　行書　司空図『江行』

「地闊分呉塞楓高映楚天曲塘春盡雨方響夜深船行紀添新夢羈愁甚往年何時京洛路馬上見人煙」

この詩は京洛の荒廃を憂う心を詠ったものである。四十文字のこの詩をいかに紙に納めながら、かつ見せ場を作るかの練習が非常に勉強になった。初創作であるが、新たな書道の面白さに気づけた。字は呉昌碩を真似たのだが、それが分かってもらえたら嬉しい。

二尺×八尺


知者不惑仁不憂君如威威眉雙愁信步行來皆坦道憑天判下非人謀用之則行舍卽休此身浩蕩浮虛舟丈夫落落掀天地豈顧束縛如窮囚千金之珠彈君不見東家老翁防虎患鳥雀掘地何煩惱用錯虎夜入室銜其頭西家兒輩不識虎執竿驅如牛癡人懲噎遂癈食愚者畏溺先自投人生達命自灑落憂讒避毀從啾啾

6

疋田研一郎　三回生

創作　行書　『啾啾詩』　二尺×八尺

「知者不惑仁憂君胡威威眉雙愁信步行来皆坦道憑天判下非人謀用之則行舍卽休此身浩蕩浮虚舟丈夫落落掀天地豈顧束縛如窮囚千金之珠弾君不見東家老翁防虎患鳥雀掘地何煩惱用錯虎夜入室銜其頭西家児輩不識虎執竿駆如牛癡人懲噎遂癈食愚者畏溺先自投人生達命自灑落憂讒避毀従啾啾」

大学に入って初めての創作です。構成など至らない部分はあるかと思いますが、好きに書けたので満足です。

7

三村祐貴子　二回生

創作　行書　『王粲詩』　二尺×八尺

「西京亂無象豺虎方遘患復棄中國去委身適荊蠻親戚對我悲朋友相追攀出門無所見白骨蔽平原」

去年の冬樟展に出した呉昌碩の創作を二八に拡大して書きました。初めての二八で最初は苦労しましたが、のびのび書けて楽しかったです。



8

家倉凌　四回生

臨書　篆書　『石鼓文』　二尺×八尺

「汧殹沔沔、烝彼淖淵。鱮鯉處之、君子漁之。…」

強くて優しい線が引きたい、その思いひとつで書き始めました。石鼓文は、時代的に甲骨文字と小篆の間にあるからか、感性と理性の間にある気がします。その塩梅に苦心しました。



7

三村祐貴子　二回生

創作　行書　『王粲詩』　二尺×八尺

「西京亂無象豺虎方遘患復棄中國去委身適荊蠻親戚對我悲朋友相追攀出門無所見白骨蔽平原」

去年の冬樟展に出した呉昌碩の創作を二八に拡大して書きました。初めての二八で最初は苦労しましたが、のびのび書けて楽しかったです。



8

家倉凌　四回生

臨書　篆書　『石鼓文』　二尺×八尺

「汧殹沔沔、烝彼淖淵。鱮鯉處之、君子漁之。…」

強くて優しい線が引きたい、その思いひとつで書き始めました。石鼓文は、時代的に甲骨文字と小篆の間にあるからか、感性と理性の間にある気がします。その塩梅に苦心しました。



9

山﨑絢香　三回生

臨書　草書　傅山『草書五言律詩軸』　二尺×八尺



「月黒一織白。林底林端索。木心信石路。只覚芒鞋平。雲霧遮不断。禽獣蹂不崩。侶伴任前後。不譲亦不争。」

傅山はやっぱり書いていて楽しいです。ぐるぐる、体を動かして書きます。恐れながら、私の楽しい気持ちが観てくださる方に伝わるような作品になっていればいいなと思っております。

10

新井一矢　三回生

臨書　楷書　『蘇孝慈墓誌銘』

半切



「司農太府卿太子左右衛率右庶子」

いつも篆書や隷書の作品を書いていますので、今回は気分を変えて楷書に挑戦しました。楷書は私にとって（というか大抵の人にとっては）原点であり基本でもあるのですが、奥が深いというか、難しいですね…　まだまだ練習あるのみです。

11

伊東優治　修士一回生

創作　かな　『一条摂政集より』　二尺×六尺

「くもゐには　わたるときけど　とぶかりの　こゑのきがたき　あきにもあるかな…他三首」

上手なかな作品は紙と墨の色の二色だけのはずなのに、二色を超えた色合いを魅せてくれると最近は感じます。線の太さや濃淡、かすれ方のちょっとした違いにより生まれるのでしょうか。その域に達するまで，修行の日々が続きます。



12

稲葉由花利　四回生

臨書　隷書　趙之謙『張衡靈憲』　全紙四分の三

「太素之先。幽清元靜。冥默不象。厥中惟靈。厥外惟無。如是久焉。斬以溟涬。蓋乃道之根。根既建。自無生有。太素始萌。可爲色。渾沌不分。故道德之者。永渾成。先天地生。其氣體也。道而形。其遲速固未可得。而未天體。」

紙と対峙する数時間だけは、ひとつの目標に向かって意識を集中させる理想の自分でいることができる。書道を始めたことが私の人生で最も幸運なことです。書道が出来ることが、書道部の人と出会えたことが、とても嬉しい。



13

上村耕平　四回生
臨書　楷書　顔真卿『顔勤礼碑』

「九爲省官存爲節度採訪觀察使魯郡公」

今回で三回目の出品となりました。もちっとした感じを出すのに苦労しました。スペースが少なく、やや詰まった感じになりがちで苦労しました。四回生になり、今回の初夏書展は教育実習で行けないですがご批評よろしくお願いいたします。



14

牛山泰喜　三回生
臨書　隷書　『木簡』　半切

「鄭子方衛益壽史步昌周千秋趙孺卿爰展世高辟」

隷書は速く書け、かつ美しい。そんな整った形が好きでずっと書いてきた隷書ですが、木簡はなんだかガサツな気がして好きになるのに時間がかかりました。まだ微妙な距離感を取りながらですが、もっと良さに気づけたらもっと仲良くなれたらそう思いながら書きました。

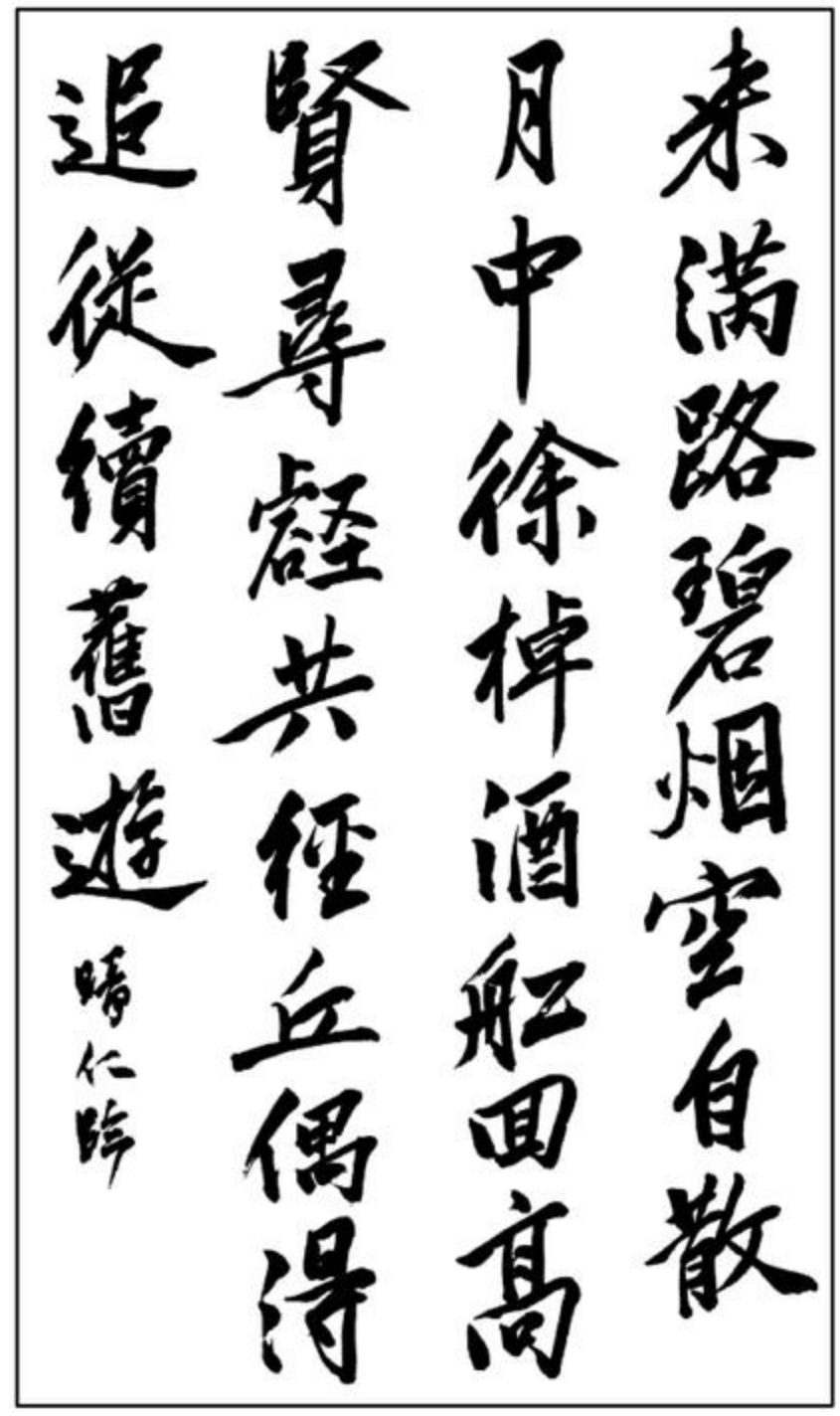


15

上井晴仁　三回生
臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　全紙

「来満路碧烟空自散月中徐棹酒船回高賢尋壑共経丘偶得追従續舊遊」

文徴明という人は高潔温順、ともすれば堅物な人物だったといわれています。書家としても最初からうまかったわけではなく努力を重ねた晩成型だそうです（Wikipedia より）。そんな人に私はなりたい。



16

闇姝恒　三回生
創作　行書　『酔人腸』　二尺×二尺

「酔人腸」

好きな歌の「不是三月也能酔人腸」（三月でなくても心酔する）という文章に感動し、書いてみました。それは書生が好きな女の子と出会って、花々が満開している三月でなくても心酔したというシーンです。



17

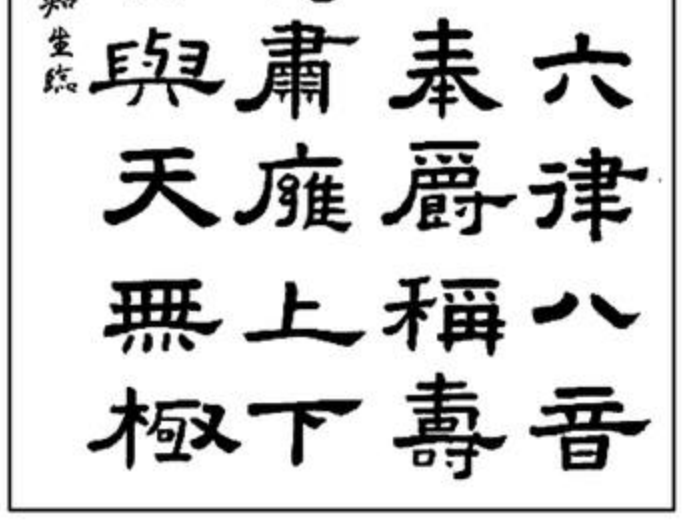
大泉陽輔　修士一回生
臨書　隷書　何紹基『臨張遷碑』　二尺×八尺

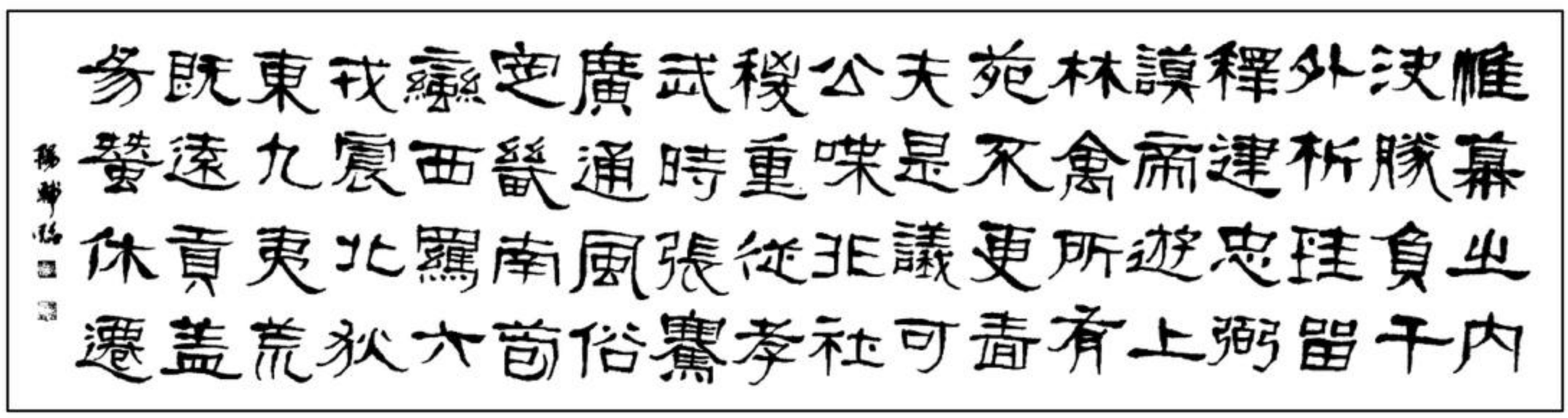
「帷幕之内決勝負…」
極端に薄い墨でふわりと書き流すのが何紹基の作品を臨書するときのこだわりです。

18

笠原知生　二回生
臨書　隷書　『史晨碑』　全紙

「雅歌吹笙　考之六律　八音克諧　蕩邪反正　奉爵稱壽　相樂終日於穆肅雍　上下蒙福　長享利貞　與天無極」
書道部に入ってからずっと隷書を書きたいと思い、今回初めて挑戦しました。この法帖を選んだ理由は、まとまった美しい印象を受けて一番自分好みだったからです。隷書独特の書法に苦戦しましたが、書いていて楽しいものだと感じました。





19

片野裕太　四回生
臨書　草書　傅山『瑶華一片七言詩軸』　半切

「瑶華一片五雲輕報札經年寫不成菡萏三峰」
傅山は自分の子供たちにこんな言葉を残したそうです。「素晴らしい字を書くには、まず人間を作りなさい。優れた人であれば、自然とその書にも奥深さが出る。」優れた人がどんな人かは難しいですが、どんなことでも感情を豊かに受けとめ、また豊かに感情を表現できるのが大切な要素の一つだと思います。それこそが『瑶華一片七言詩軸』の豊かな線を生んでいると思います。豊かさが少しでも出ていれば嬉しいです。



20

川上澄香　修士一回生
創作　刻字　『清露』　色紙

「清露」
みずみずしい葉っぱの色、すがすがしい風など五月から六月は本当に気持ちのいい季節で好きです。つい散歩したくなります。そんな感覚が想起されるような作品にしようと思いました。刻字は初めてですが、勉強になりました。品評よろしくお願いします。

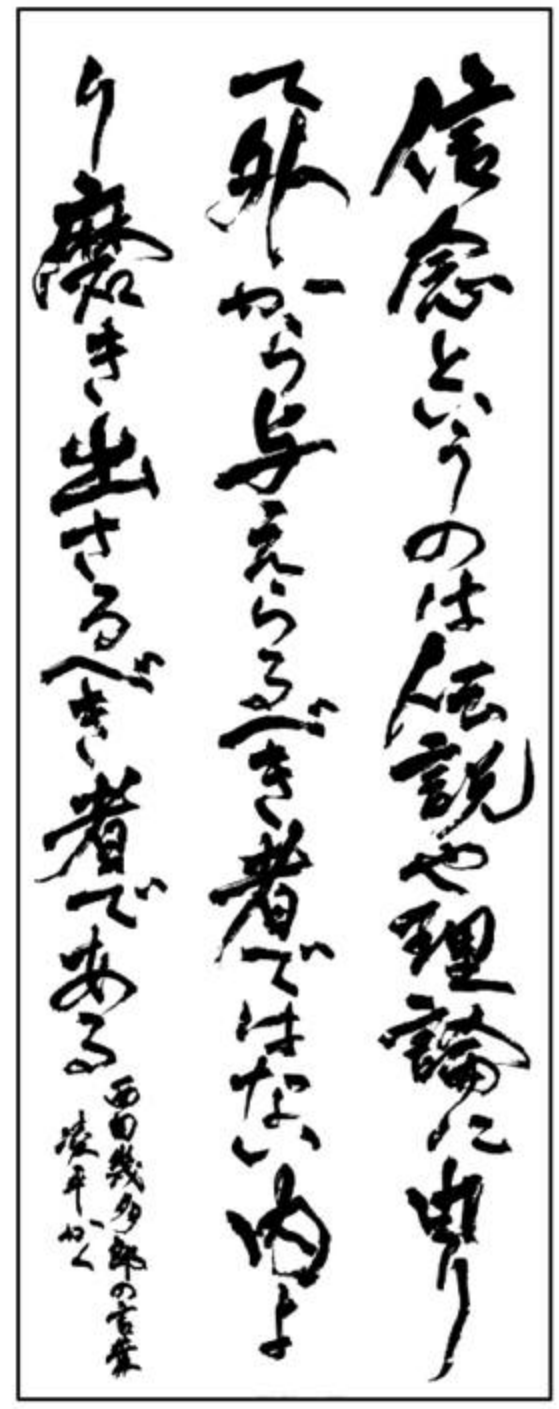


21

藏岡凌平　三回生
創作　調和体　『慧眼 ―西田幾多郎の言葉―』　聯落

「信念というのは伝説や理論に由りて外から与えらるべき者ではない、内より磨き出さるべき者である。」

あらゆる物事を多面的に見られるようになるべく、様々な立場の人から学び続けたいと願う自分が、戒めの意味で心を打たれた言葉です。「慧眼」は、元は「えげん」と読む禅の言葉で、敬虔な禅教徒であったという西田氏の言葉に別の形で添えました。このパンフレットでは見られないので、会場で目にしていただけると幸いです。

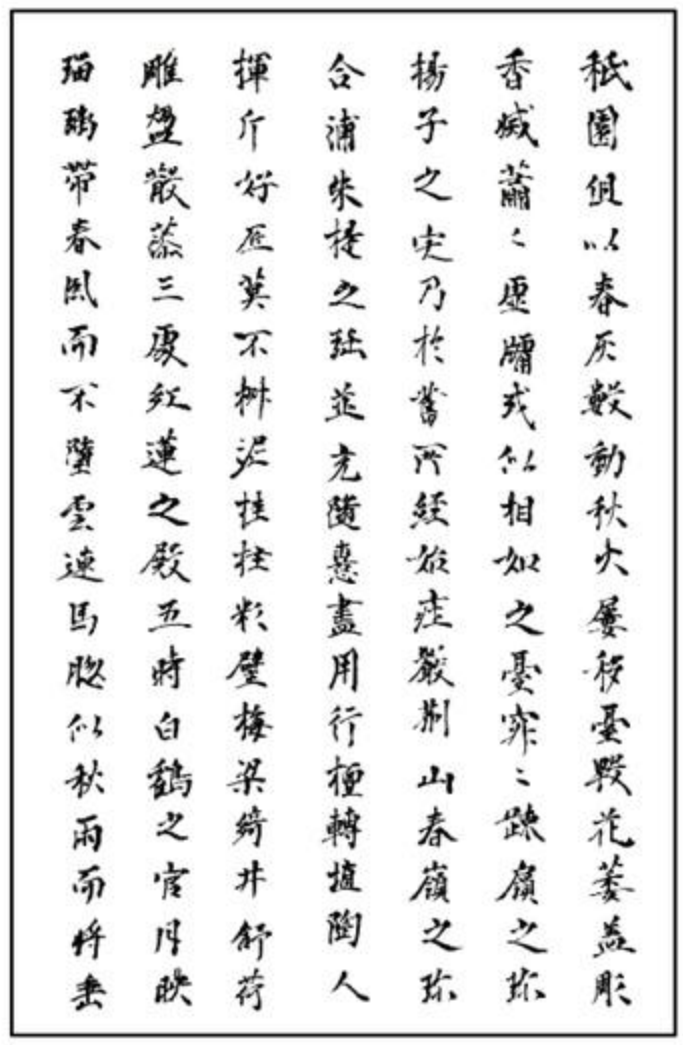


22

島津七明　三回生
臨書　楷書　聖武天皇『雑集』　270×360mm (A4)

「祇園。但以春灰數動。秋水屢移。臺毀花萎。蓋彫香滅…」

切り絵ならぬ切り字の作品です。レース切り絵に興味を持ち始めてから、書道を通じて何か作品を創りたいと思い、この作品を創りました。パンフレットでは一部のみ掲載していますが、今回は三百五文字切ります。

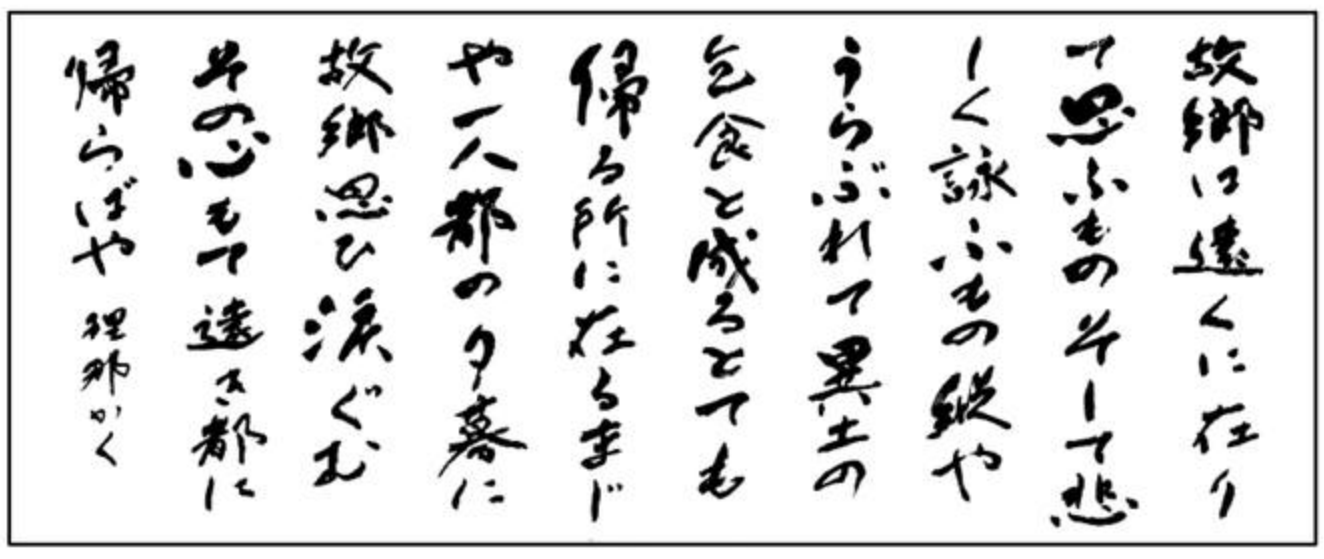


23

篠原理那　三回生
創作　調和体　『ふるさと』　聯落

「故郷は遠くに在りて思ふもの　そして悲しく詠ふもの　縦やうらぶれて異土の乞食となるとても　帰る所に在るまじや　一人都の夕暮に　故郷思ひ涙ぐむ　その心もて　遠き都に帰らばや」

室生犀星の「ふるさと」の詩を書きました。故郷に帰りたい思いと、このままでは帰れない思いの間で故郷を思う心情を表した内容です。大学で故郷を離れなかなか帰れなくなった寂しさの中にも、将来必ず帰るという確固たる決意を感じていただければと思います。

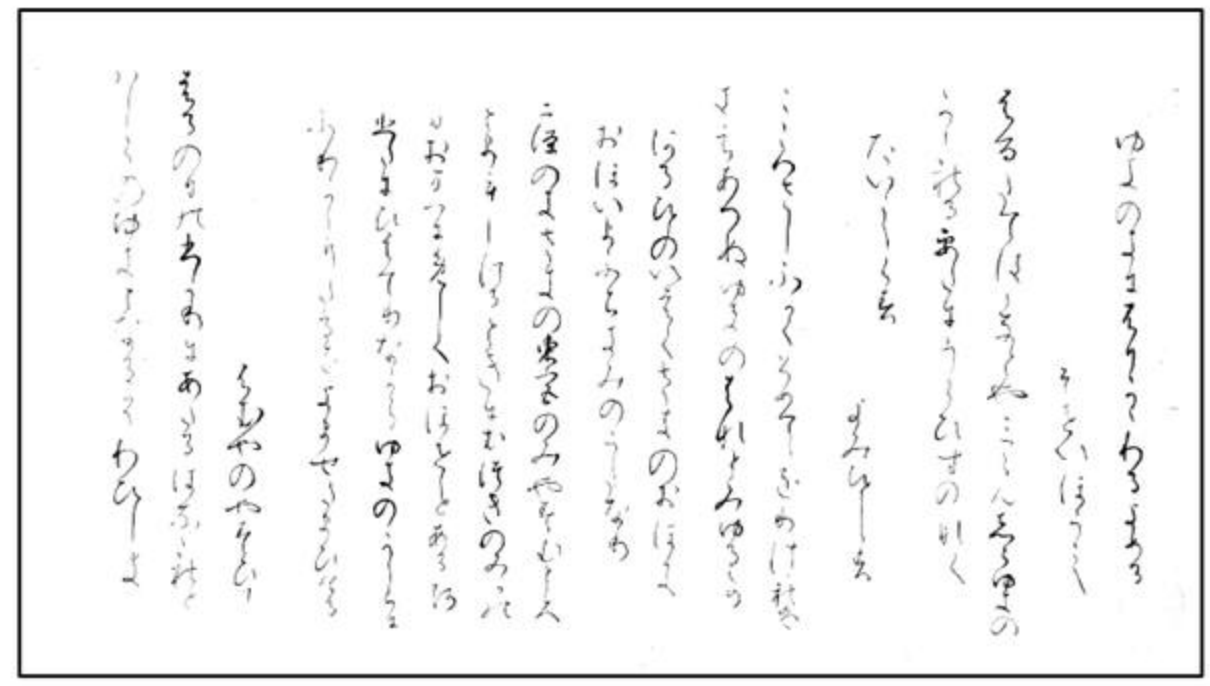


24

下坂桃代　二回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　巻子

「ゆき（支）のき（支）に（尓）ふ（不）りか（可）ゝれるよめるそせ（世）いほうし（之）は（者）る（留）た（多）てばゝ（は）な（奈）とやみ（三）らむ（无）し（志）らゆき（支）のか（可）ゝれ（礼）るえ（要）だ（多）に（尓）うぐひすのな（那）くだいし（之）らず（春）よみびとしらずろざしふか（可）くそ（曽）めてしをり（利）けれ（礼）ば（盤）き（支）えあへぬゆき（支）のは（者）な（那）とみゆるか（可）…」

大学生のうちに、有名どころの仮名の臨書を練習し、ひとつひとつ作品として残していきたいと思い、前回の冬樟展での寸松庵色紙の作品に続き、今回の初夏書展は高野切第一種の巻子作品に挑戦しました。繊細な線もあり、力強く墨ののった線もあり、この高野切第一種のもつ美しさを表現するのは、とても難しかったです。

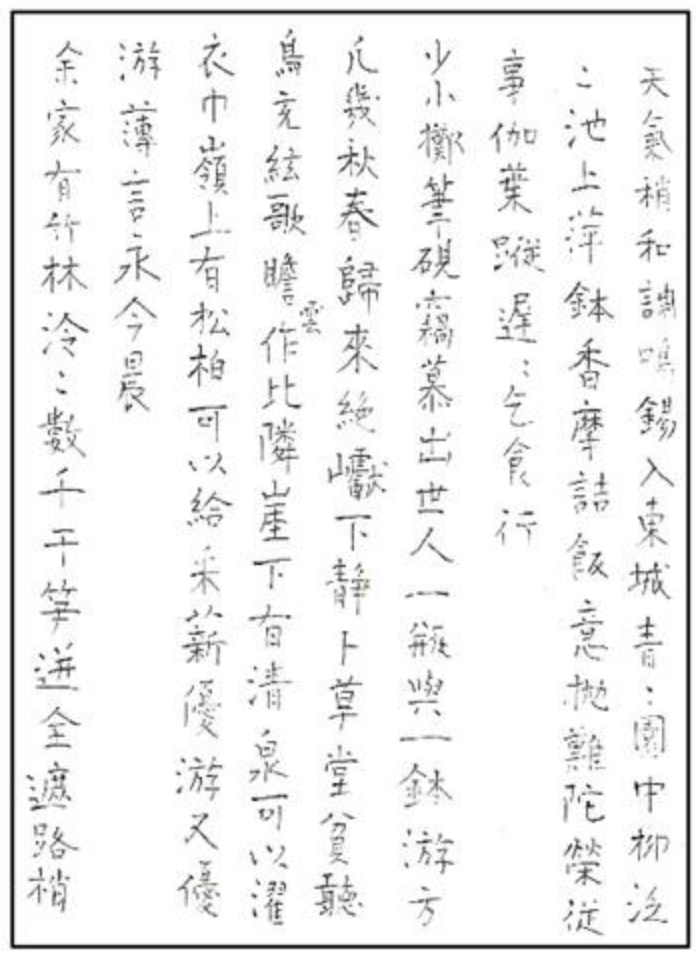


25

白谷暢浩　三回生
臨書　楷書　良寛『天気稍和調』　巻子

「天気稍和調鳴錫入東白青丶園中柳泛…」

私がお世話になった高校の書道の先生は良寛の作品をよく臨書されていたそうです。それを知り、ある意味自分の字のルーツともいえる良寛の作品を臨書してみたくなったのです。



26

宗哲仁　三回生
創作　隷書　『長安道』　四尺×四尺

「鳴鞭過酒肆　袨服遊倡門　百萬一時盡　含情無片言」

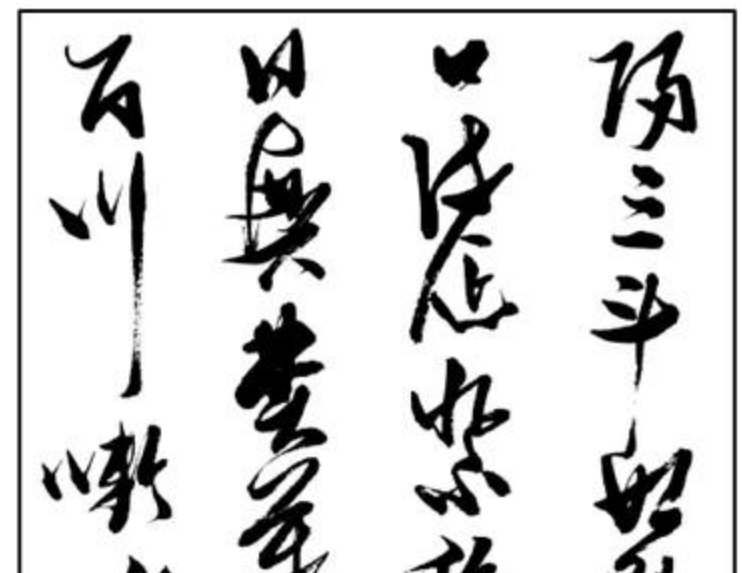
鞭の音を合図に飲み屋に集まり、派手な衣装で遊びほうけて百万の金を一瞬にして使い切っても、一言も口には出さない……ここまでとは言いませんが、豪快な生き方をしてみたいものです。



27

宗哲仁　三回生
臨書　草書　張瑞図『杜甫飲中八仙歌巻』　全紙

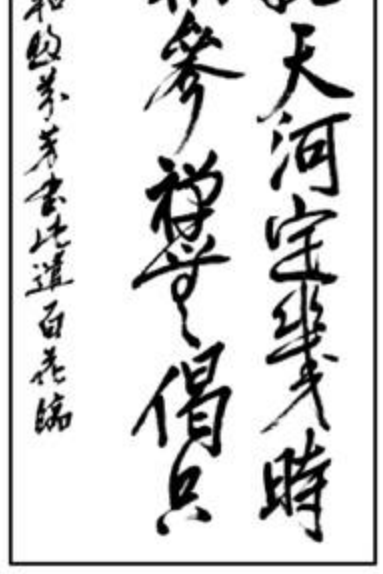
「陽三斗始朝天道逢麴車口流涎恨不移向酒泉左相日興費萬錢飲如長鯨吸百川銜盃樂聖」
しなやかでキレのある筆画がお気に入りです。側筆を意識し、新たな筆使いの習得に励みました。書いている様子を「リズミカル」と評されました。締まりのない肉体が揺れ動く様を想像していただく必要は、特にございません。



28

中谷百花　四回生
臨書　行書　呉昌碩『行書題沈寐叟海日樓圖詩軸』　半切

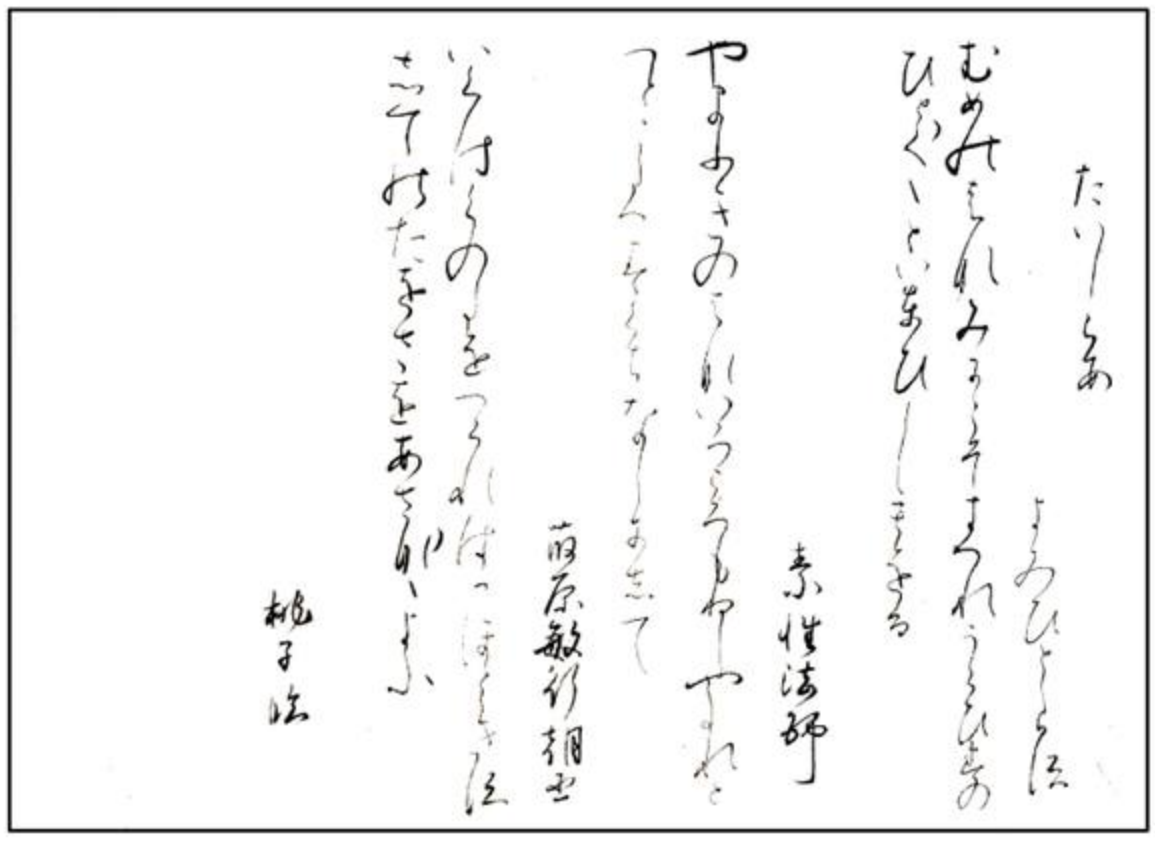
「望京樓上日遲遲手挽天河定幾時華藥四闌雲一衲参禪無偈只攢眉」
呉昌碩が七十七歳で書いた作品を臨書しました。原本の渋さが少しでも出ていれば幸いです。



29

武田桃子　三回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第三種』　半切４分の１

「だいしらず　よみびとしらず　むめのはなみにこそきつれうぐひすの
ひとく〳〵といひしもをる
素性法師　やまぶきのはないろごろもぬしやたれと　へどこたへずくち
なしにして
藤原敏行朝臣　いくばくのたをつくればかほとゝぎす　しでのたをさを
あさな〳〵よぶ」
数年ぶりにかなを書きました。太さを均等に保たなければいけない所が意外と多く、楷書の書き方に慣れていると苦労しました。他にも、震えることなく、かな独特の流れるように書くのが難しいと思いました。でも、書いていて楽しかったです！



30

寶官紗紀　三回生
臨書　篆書　楊沂孫『八言對聯』　一尺×五尺二連

「抱徳推恩含氣化物　長生久視美意延年」

初めて篆書に挑戦しました。かねてから篆書独特の可愛さに惹かれていて、今回ついに挑戦するということで、全力で可愛さを追及してみました。法帖の様なぶれない線を出し切れなかったのが心残りですが、印象に残る作品になっていればと思います。



31

松澤祐実　四回生
臨書　楷書　趙孟頫『玄妙觀重修三門記』　半切

「天地闔闢運乎鴻樞而軋坤爲之戸日月出入經乎黄道而卯酉爲之門是故建設琳宮」

今回は楷書を書きたいと思い部室で法帖を見ていて、この整った字にひかれました。毎回半切二行でも字が大きくなりがちな私にとって半切三行は難しかったです。

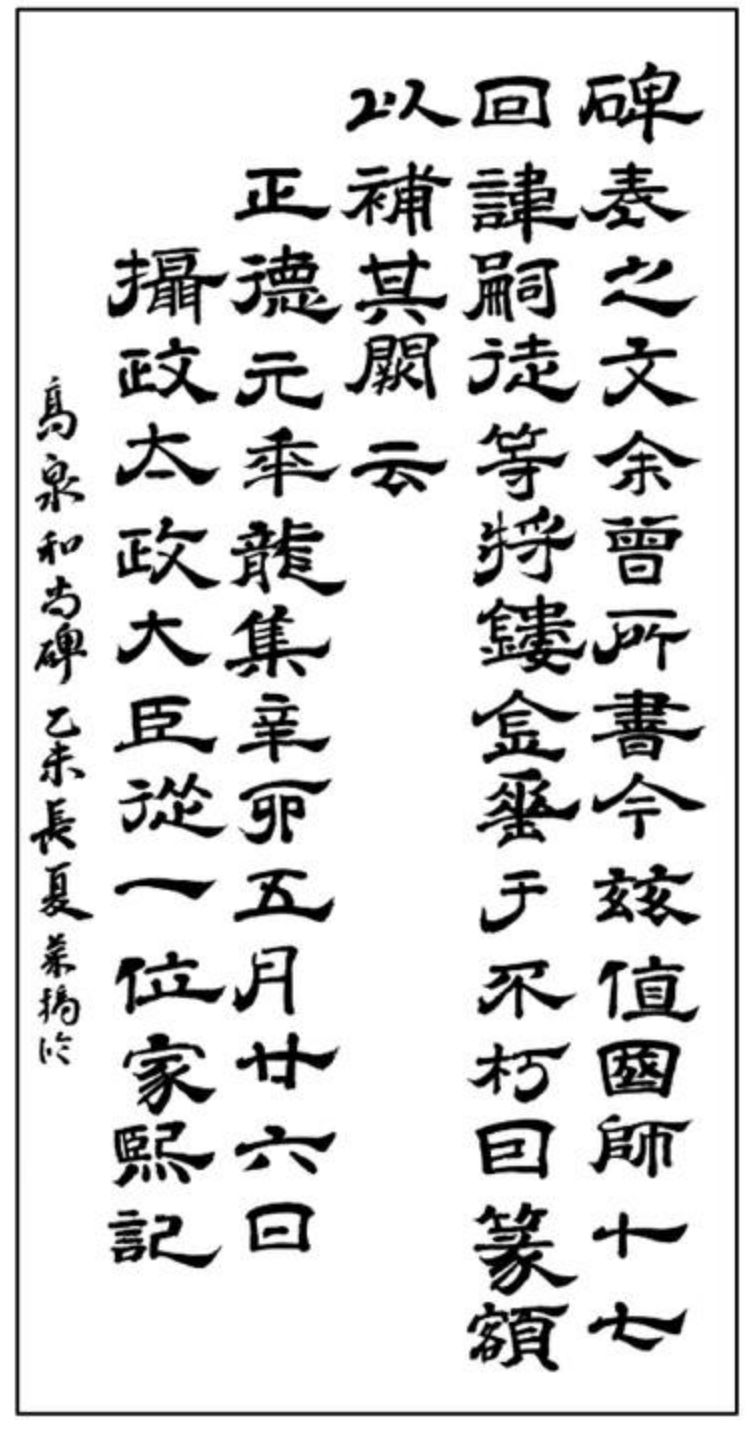


32

堀場菜摘　二回生
臨書　隷書　近衛家熙『高泉和尚碑』　全紙

「碑表之文余曾所書今玆値國師十七回諱嗣徒等将鏤金爽于不朽曰蒙額以補其闕云正徳元年龍集辛卯五月廿六日攝政太政大臣従一位家熙記」

隷書を書いてみたいと思い、沢山の作品を見ていたときこの作品を見つけました。有名な作品ではありませんが、すっきりした雰囲気の隷書に惹かれ、書くことを決めました。様々な起筆や波磔があり、書き分けるのに苦労しましたが、書いていて楽しかったです。



33

矢野凱己　二回生
臨書　楷書　『高貞碑』　聯落

「我徳如風物應如響弱冠以外戚令望除秘書郎傃驎閣而來儀瞻石渠而式践於是縦容校文」
原本のような力強くもきれいな書を書きたいと思い臨書しました。その二つを両立させるのに大変苦戦しましたが、なんとかまとめあげることができました。



34

山口和樹　二回生
臨書　楷書　趙之謙『齋民要樹』　全紙

「凡耕之本在干趣時和土務糞澤早鉏穫春凍解地氣始通土一和解夏至天」
圧倒的迫力かつダイナミックなインパクト。そんな男気溢れる漢になりたいと願う、十九歳草食系男子の渾身の作品をご覧あれ。

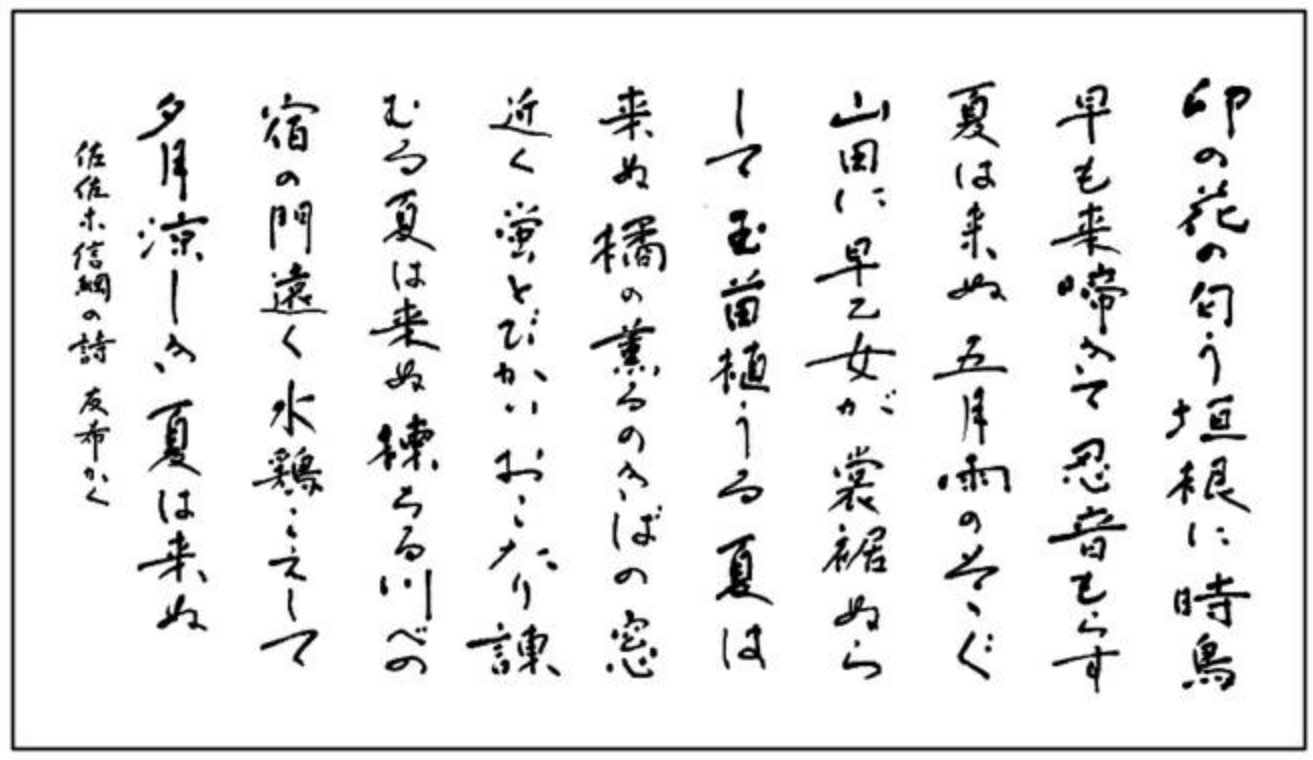


35

吉村友希　三回生
創作　調和体　『夏は来ぬ』　全紙

「卯の花の匂う垣根に時鳥早も来啼きて忍音もらす夏は来ぬ　五月雨のそそぐ山田に早乙女が裳裾ぬらして玉苗植うる夏は来ぬ　橘の薫る軒ばの窓近く蛍とびかいおこたり諫むる夏は来ぬ　練る練る川べの宿の門遠く水鶏こえて夕涼しき夏は来ぬ」
佐佐木信綱の詩　友希なぐ

右も左もわからない状態から始まり、初めて調和体の作品に挑戦しました。さわやかな初夏の風景とこの唱歌の作品としてまとめるのに必死でした。きれいなメロディーがこの作品を見ていただいた方に伝わっていれば、と思います。



36

渡辺顕　二回生
臨書　行書　褚遂良『文皇哀冊』　半切

「楽華曽舉。禮葉旁垂。沙塲磬翳。斗極咸羈。」

二回生にして初めて書展に出しました。ぱっと見てかっこいいと思ったのでこれを選びました。そのかっこよさ、独特な線の太さ、丸さを表現することが大変でした。

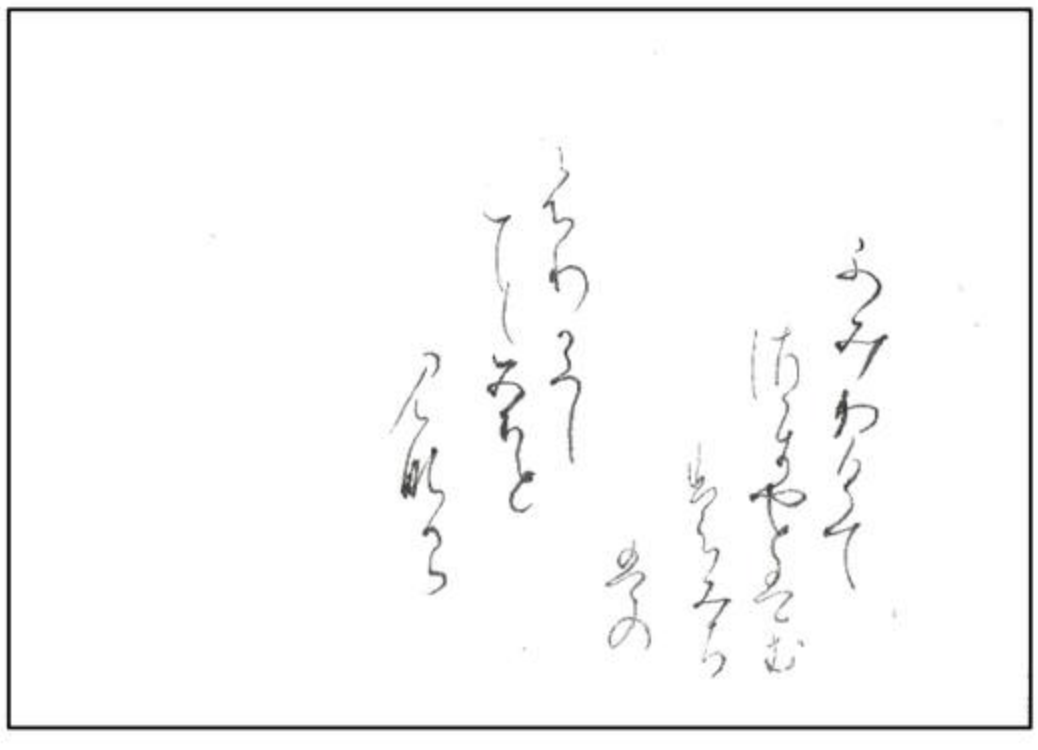


37

渡辺健介　修士一回生
臨書　かな　伝紀貫之『寸松庵色紙』　13.2cm×12.7cm　四枚

「ふみわけ(介)てさ(佐)らに(尓)やとは(盤)むも(裳)みぢば(盤)の　ふ(不)り(利)か(可)くしてしみちとみ(見)な(那)が(可)ら」

『寸松庵色紙』の「余白の美と線の緩急」を表現したいと思い臨書しました。今まで漢字作品しか書いてこなかったですが、遠くでしか見ていなかったかなを実際書いてみると、次々と新しい発見がありました。



38

矢野凱己・山口和樹　二回生
創作　調和体　『一逢』　全紙

「うたかたの出逢いが描く幸せへの軌跡」

出逢いとは儚い。そこから始まるストーリーは無限の可能性を秘めている。だからこそ、その儚さを大切にしたい。



39

上西隆太・篠原理那・宗哲仁・吉村友希　三回生
創作　『駆け抜けて』　半懐紙四連

「春夏秋冬」
巡り会って、春。
心を継いで、夏。
手を繋いで、秋。
語り合って、冬。
駆け抜けて、春夏秋冬。

40

一回生合作
創作　『力を合わせて』

一回生が、数人ずつグループを組んで熟語を書きました。
入部して初めて出す自分たちの作品です。

41

全体合作
創作　『七夕の願い事』

夏といえば七夕。部員たちの切実な願いが、星に届きますように。
今回はお客様も合作に参加できる、書道部初の企画です。

42

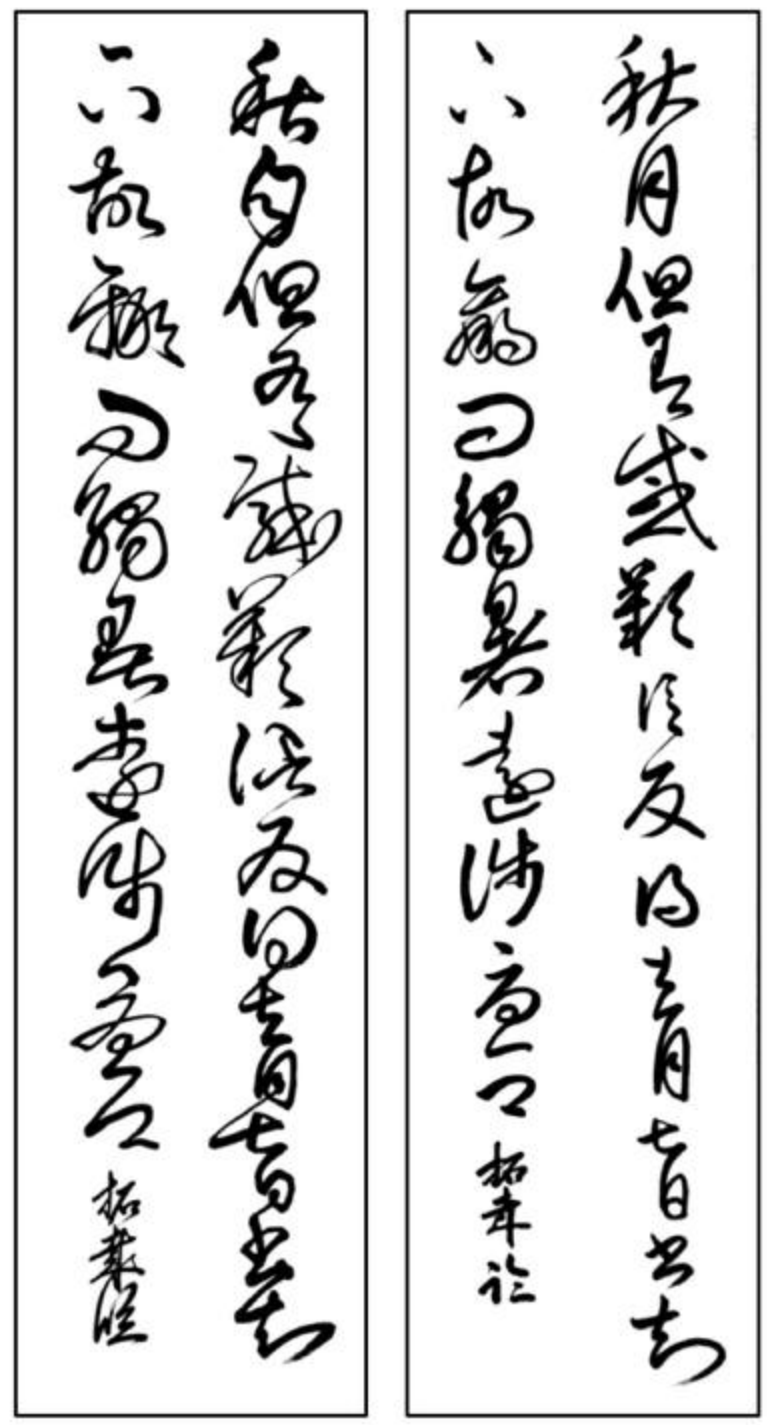
三回生合作
創作　『軌跡』　横 1700mm×縦 1200mm

書に向き合った時間、作品にぶつけた想い。積み重ねた努力、笑い合った記憶。迷い、つまずき、励まし合いながら描いた僕らの軌跡は、きっと何より美しい。入部から今までの書道部生活を、それぞれが一枚の紙に表現しました。

○禅居庵

43

荒巻拓哉　三回生
臨書　草書　王羲之『秋月帖』・王鐸『臨秋月帖』　半切二連

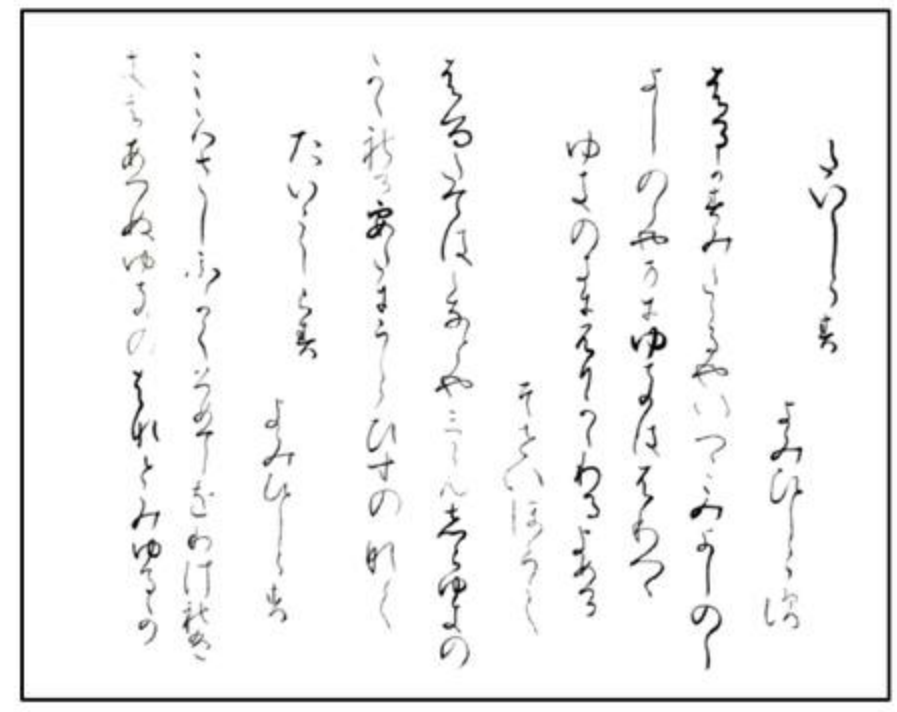


「（忽然）秋月。但有感歎。信反。得去月七日書。知（足）下故羸（疾）問。觸暑遠渉。憂卿」

右側が東晋の王羲之の、左側が清の王鐸の作品を臨書したものです。王鐸は王羲之の書をよく臨書していますが、かなり違った雰囲気になっています。王羲之の元の作品と王鐸の臨書、両方を形臨することで何か得られるのでは…と思い挑戦しましたが、書いてみるとなかなか似せられず、両方同じようになってしまい……難しいです。

44

荒巻拓哉　三回生
臨書　かな　伝紀貫之『高野切第一種』　半切五分の一

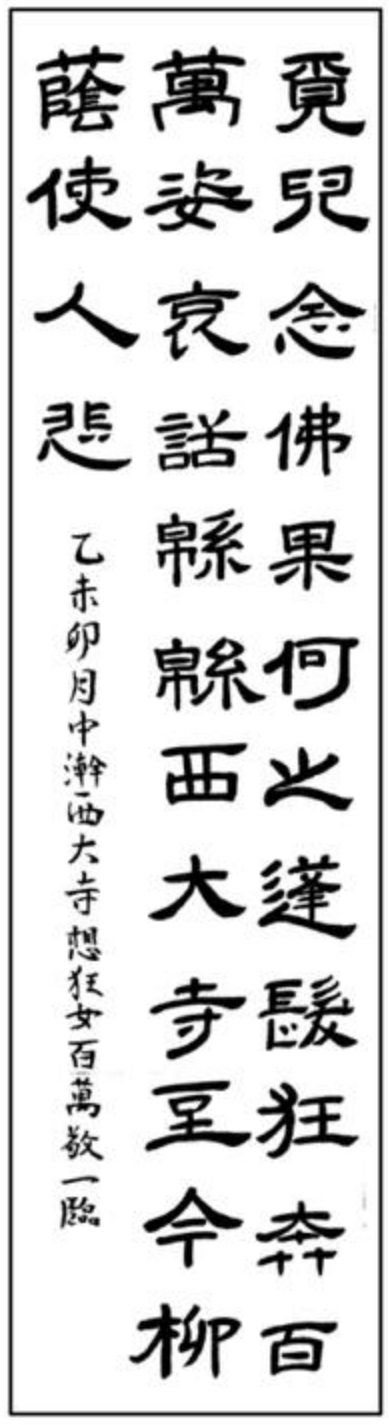


「だ（多）いしらず（春）　よみびとしらず（須）　は（者）るが（可）す（春）み　た（多）ゝるやいづこみよしのゝ　よしのゝやま（万）に（尓）ゆき（支）はふ（不）り（利）つゝ…」

初めてのかな作品の出品です。墨の濃淡や行間など、いろいろな部分で苦労しました。初心者のくせに練習が疎かになってしまいましたが、ぜひご批評ください。

45

石川敬一　三回生
臨書　隷書　西大寺『想狂女百萬』　半切



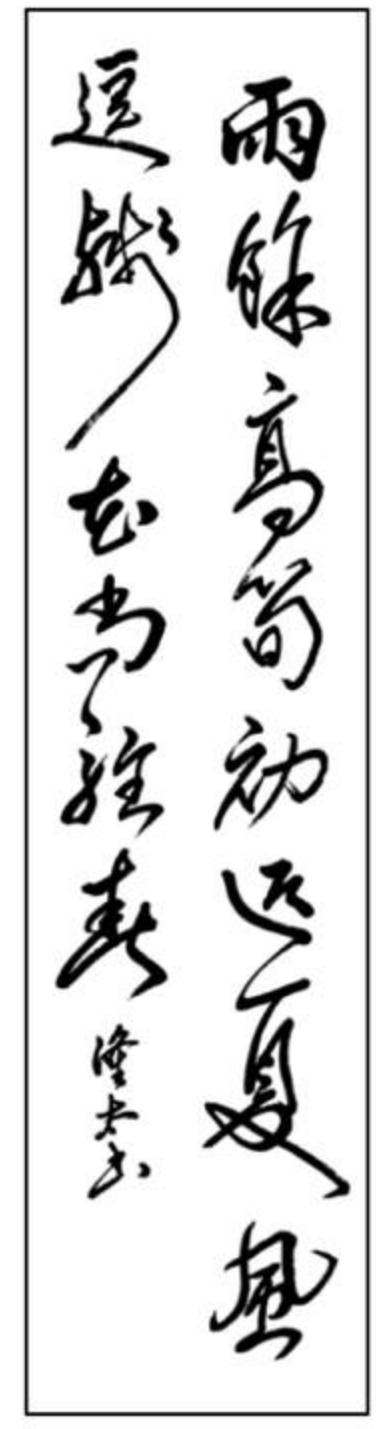
「覓兒念佛果何之　蓬髮狂奔百萬姿　哀話綿綿西大寺　至今柳蔭使人悲」

最近、奈良へ行く機会があり西大寺というお寺に参拝してきました。とても落ち着いていて静かな佇まいのお寺です。境内に石碑があったのですが、寺の雰囲気に凄くとけ込んでいて心惹かれて臨書してみました。また時間ができた時に行ってみたいと思います。

46

上西隆太　三回生
創作　行草　『楊基詩』　半切

「雨餘高筍初迎夏風逗殘花尚駐春」
「初夏を迎えた竹の子は雨後に高く伸び、晩春の花はまだ散り残って吹く風に折々見える。」そんな初夏の情景とともにお楽しみいただければ幸いです。



47

角谷遊野　三回生
創作　調和体　『薤露青』　全紙

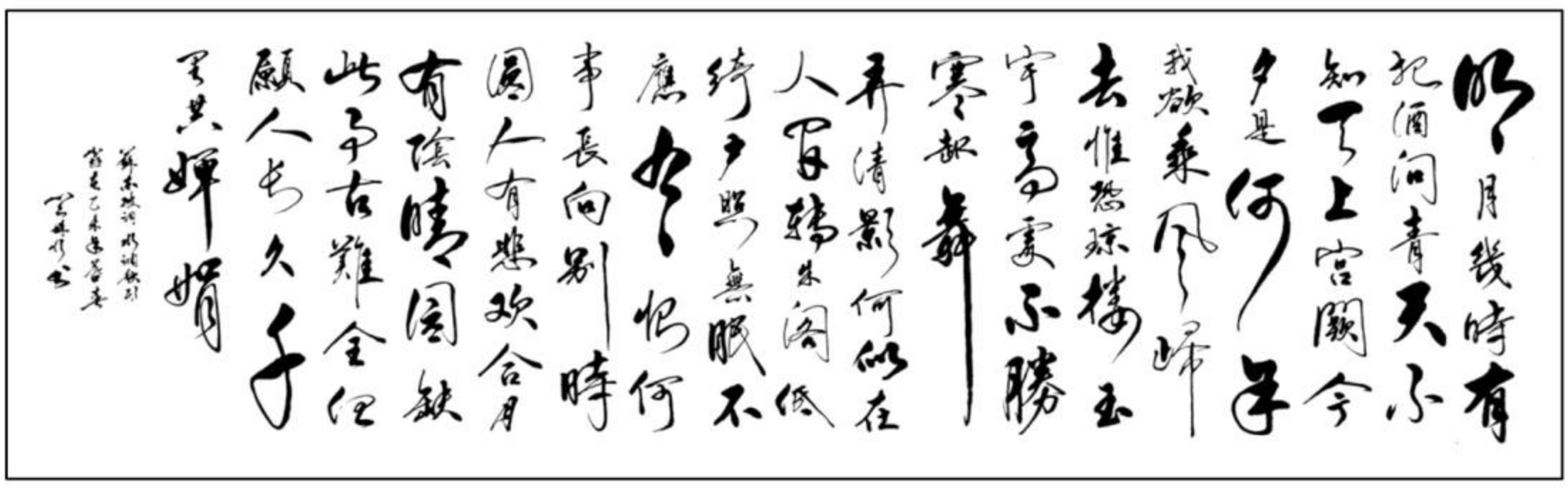
「みをつくしの列をなつかしくうかべ　薤露青の聖らかな空明のなかを　たえずさびしく湧き鳴りながら　よもすがら南十字へながれる水よ…」
宮沢賢治の詩です。薤露青（かいろせい）は賢治の造語で、らっきょうの細い葉先についた朝露が、はかなく消えていく様子と言われています。淡い幻想のなかに静かな悲しみを湛えた、さわやかで感傷的な世界観を表現しようと試みました。初の調和体作品にしてはテーマが難しすぎました。実力のなさを痛感しています。



48

閻姝恒　三回生
創作　行書　『水調歌頭』
四尺×二尺

「明月幾時有　把酒問青天　…人有悲歡離合　月有陰晴圓缺　此事古難全　但願人長久　千里共嬋娟」
最後の所が好きで、書いて見ました。人には悲しみと歓び、出会いと別れがあり、月には晴れと曇り、満ち欠けがある、古き世から完全とは難しいもの。ただお互いが長く久しきこと、今宵も同じ月を見ていることを願うばかりだ。



49

釜阪紘平　三回生
創作　行書　『萌黄網脚猪口』　半切

「萌黄網脚猪口」

今回もイグチ科のきのこ、Retiboletus nigerrimus の和名を用いて創作しました。柄が淡黄緑色の地に黒い粉を吹き付けたように隆起した網目に覆われるのでこの名前が付きました。かつて、クマ族の人々が宗教儀式を行う際に食したと言われるきのこです。



50

河合翼　四回生
創作　隷書　『陶淵明　飲酒其一「衰榮無定在」より』　半切

「忽與一樽酒日夕歡相持」

一樽の酒とともに、日夕気ままに過ごそう。



51

藏岡凌平　三回生
創作　篆・隷・楷・行草　『絶句四首 ―夏―』　半切四連

「黒雲翻墨未遮山白雨跳珠亂入船巻地風來忽吹散望湖樓下水如天」他、全四首

色々な書体に触れてみたいと意気込んでいた一回生のある日、鄧石如による四書体一作品の書を目にし、一年半が経った今、同様の形式での出品に至りました。同時に調和体作品やこのパンフレットの編集に取り組んでいたこともあり息切れし続けましたが、全力で頑張れたと感じています。









52

小島健史　四回生

創作　『驚天動地』　65cm×65cm

「驚天動地」

【過去】＝書くまでの構想および日々と、

【現在】＝書く瞬間での衝動および自分とを、作品に保存・投影するつもりで書きました。

製作中BGMはU2「Raised by Wolves」です。

この作品を見る度、平成27年の春を思い出すように。



53

小松聡子　修士一回生

臨書　楷書　『一字蓮台法華経神力品』　20.5cm×42cm

「六種振動其中…」

本で見て色とりどりの花たちを「わあ可愛い」と思って書き始めたのですが、蓮の上に乗った一字一字は一つの仏さまに見立てられているそうです。そう聞くと中途半端に臨書できないなとびびり、一生懸命書きました。実物は京都国立博物館にあるそうなので、ぜひ一度見に行ってみたいと思います。



54

篠原理那　三回生

創作　草書　『翔破』　全紙

「翔破」

長き道のりをも越えて目的地に到達する、その時まで諦めない強さを。



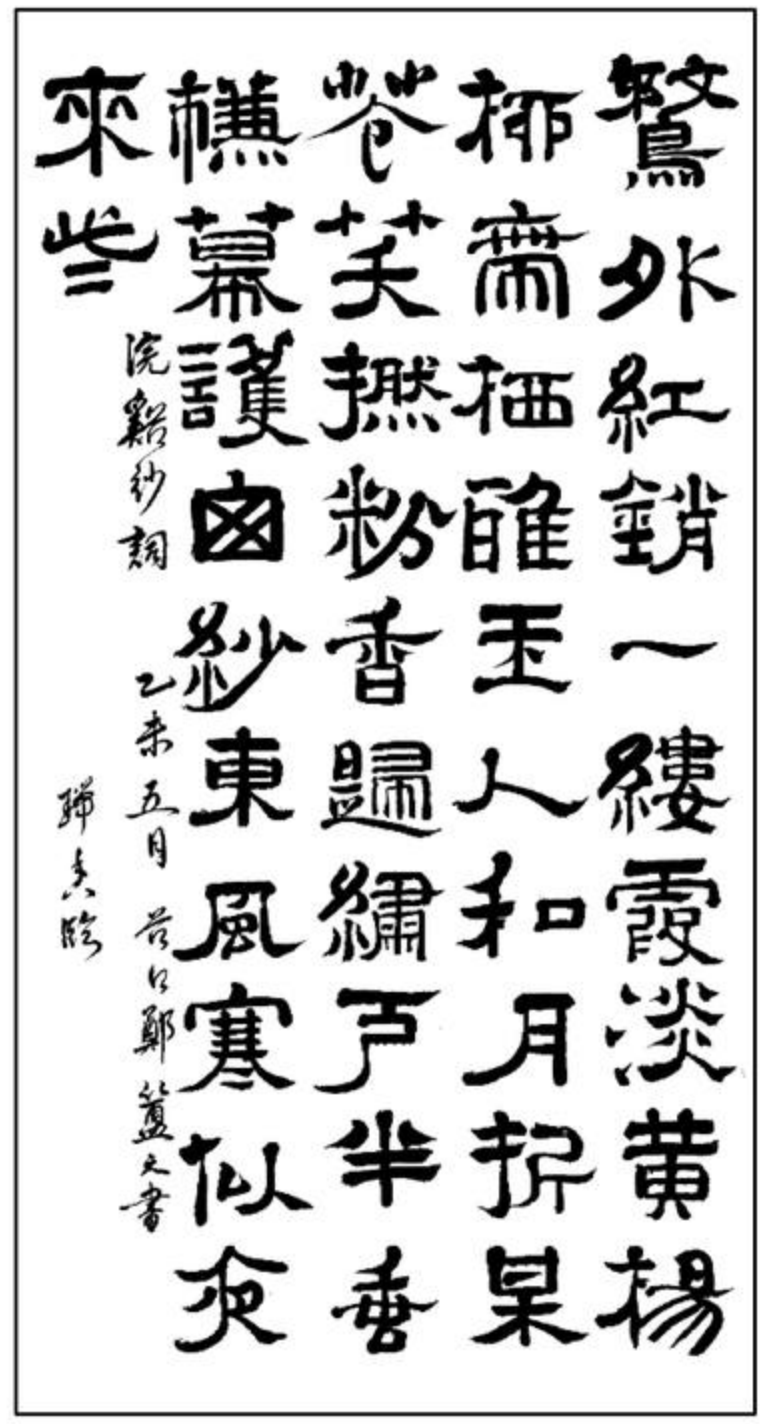
55

清水麻友美　二回生

臨書　隷書　鄭簠『隷書浣谿紗詞軸』　全紙

「驚外紅銷一縷霞淡黄楊柳帯栖雅…」

大きなサイズの隷書作品を書くのは今回が初めてでした。私が臨書したのは清代の書家のもので、隷書独特の力強さに加えどこか華やかさも感じる字体に惹かれました。元の作品をみて私が感じたものを表現するのが難しかったのですが、悩みながら仕上げました。



56

下坂桃代　二回生

創作　かな　『春の苑』　半懐紙二分の一　二枚

「春のその（農）　く（久）れな（奈）みに（耳）ほ（本）ふ　桃の花　した（多）てるみ（三）ち（遅）に（尓）　いてた（多）つ　をとめ（免）天の（農）うみ（三）に　く（久）もの（能）な（那）みた（多）ち（遅）　月のふね（年）ほ（本）しの（農）は（八）やしに（二）　こき（支）か（可）く（久）るみ（三）　ゆ」

万葉集から好きな歌を二首選びました。

やっぱり、仮名が好き。

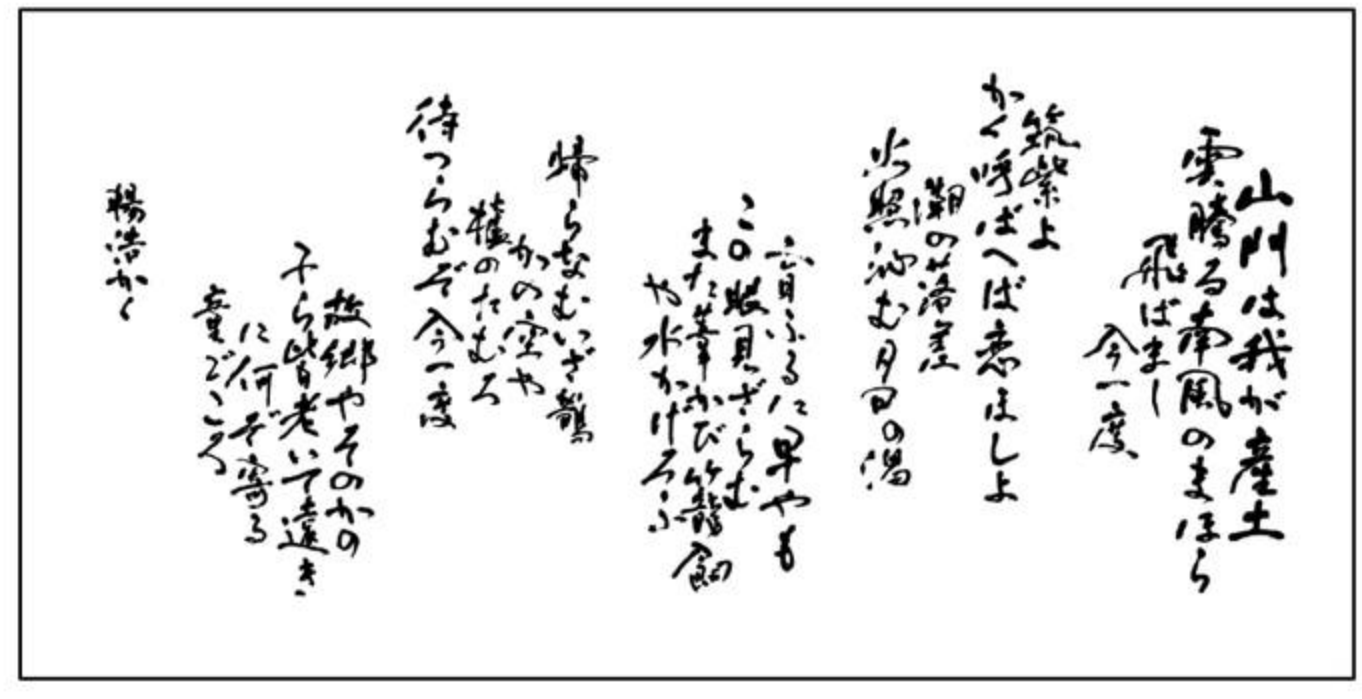




57

白谷暢浩　三回生
創作　調和体　『帰去来』　全紙

「山門は我が産土
雲騰る南風のまほら
飛ばまし今一度・・・」
長い時間を経ても、
目が見えなくなっても、
あのときの景色はずっと心の中に。



58

鈴木貴也　修士一回生
臨書　行書　沈周『次韻東園菊花詩』　半切

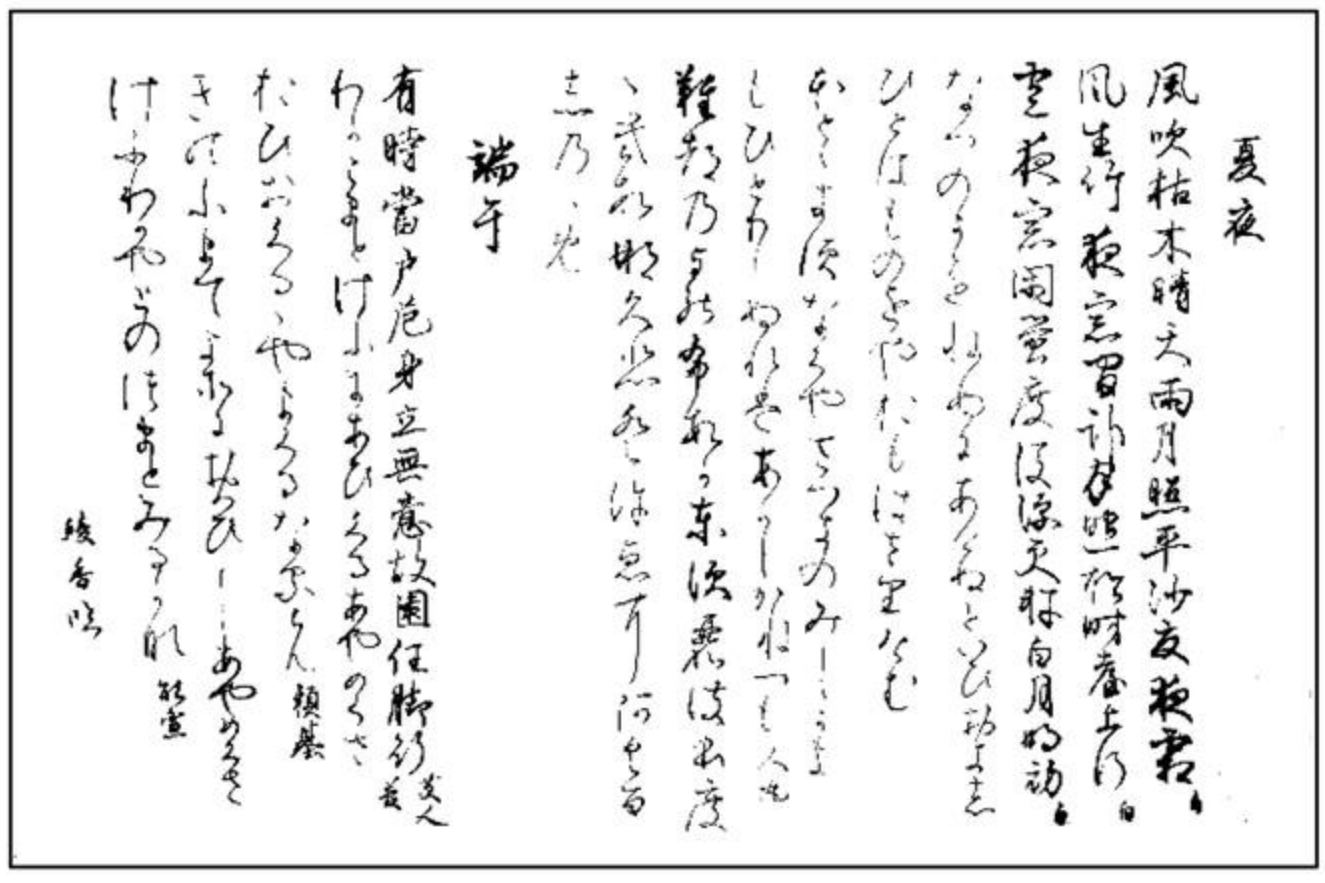
「難翁如欲学我無却鮮歓園有松与竹秀色」
学業の合間に勘を取り戻しつつ。荒っぽい筆遣いなのにどこか爽やかさもある書体が好みです。



59

中野綾香　四回生
臨書　かな　伝藤原行成『粘葉本和漢朗詠集』　半懐紙

「夏夜　風吹枯木晴天雨、月照平沙夏夜霜。白　風生竹夜窓間臥、月照松時台上行。白空夜窓閑蛍度後、深更軒白月明初。白…」
なつのよをねぬにあけぬといひおいし　ひとはものをやおもはざりけむ
ほとゝぎすなくやさつきのみじかよもひとりしぬればあかしかねつも　人丸
なつのよのふすかとすればほとゝぎすなくひとこゑにあくるしのゝめ…」
ひさしぶりに仮名を書いてみました。漢字を書いてる時より楽しかったです。
やっぱり私は仮名が好きなようです。



60

深谷拓未　二回生
創作　調和体『楓橋夜泊』　二尺×四尺

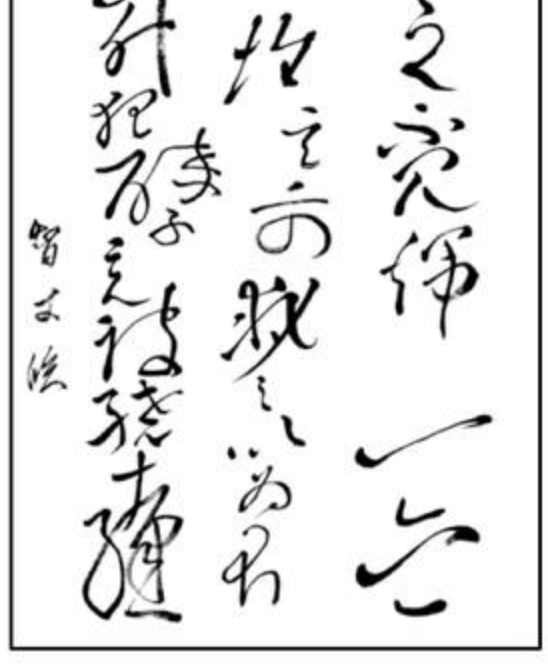
「月落烏啼　霜満天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘声到客船」作品制作には、書体、用具の選定も重要であるが、書家のものをはじめ、様々な作品を鑑賞することも欠かせないと思っている。今回の作品は、少ないながらも、自分の今日に至るまでの作品鑑賞の蓄積から自然と生まれたものである。



61

古川智大　三回生
臨書　草書　良寛『心水何澄々』　聯落

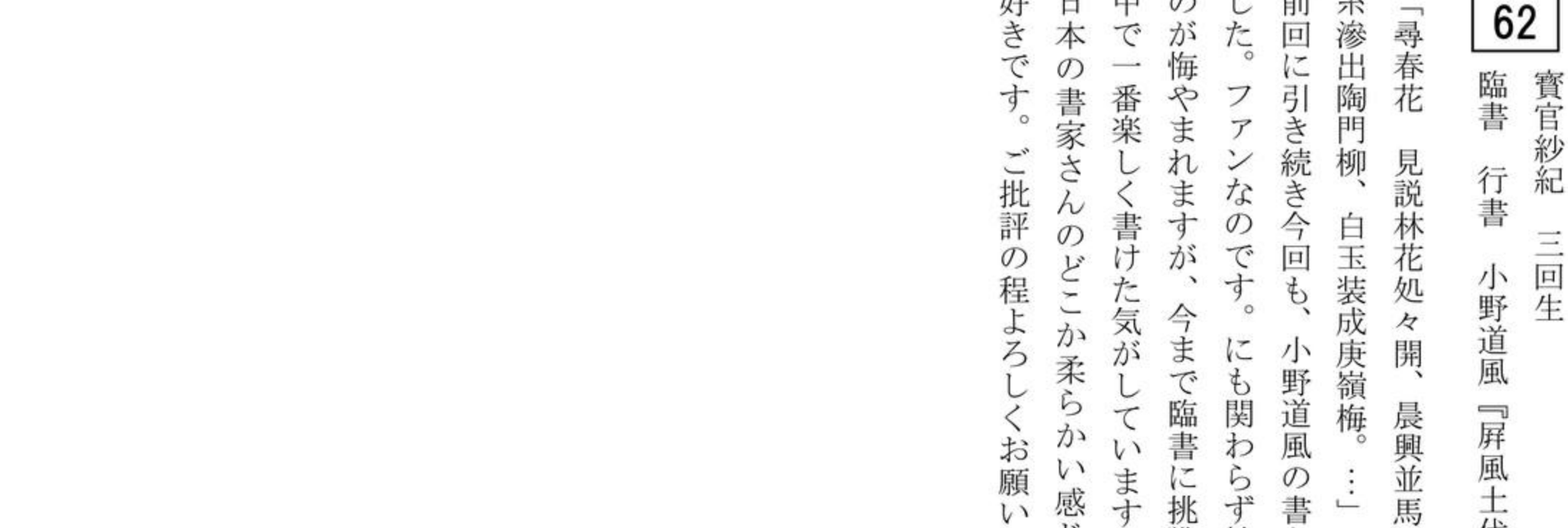
「心水何澄々　望之不見端　一念纔警起　萬像堆其前　執之以爲有　乘之不永還　苦哉狂醉子　竟被繞十纏」初めて草書に挑戦しました。今まで楷書を中心にやっていたせいか、かすれを出すことや流れを意識して書くことに苦戦しました。

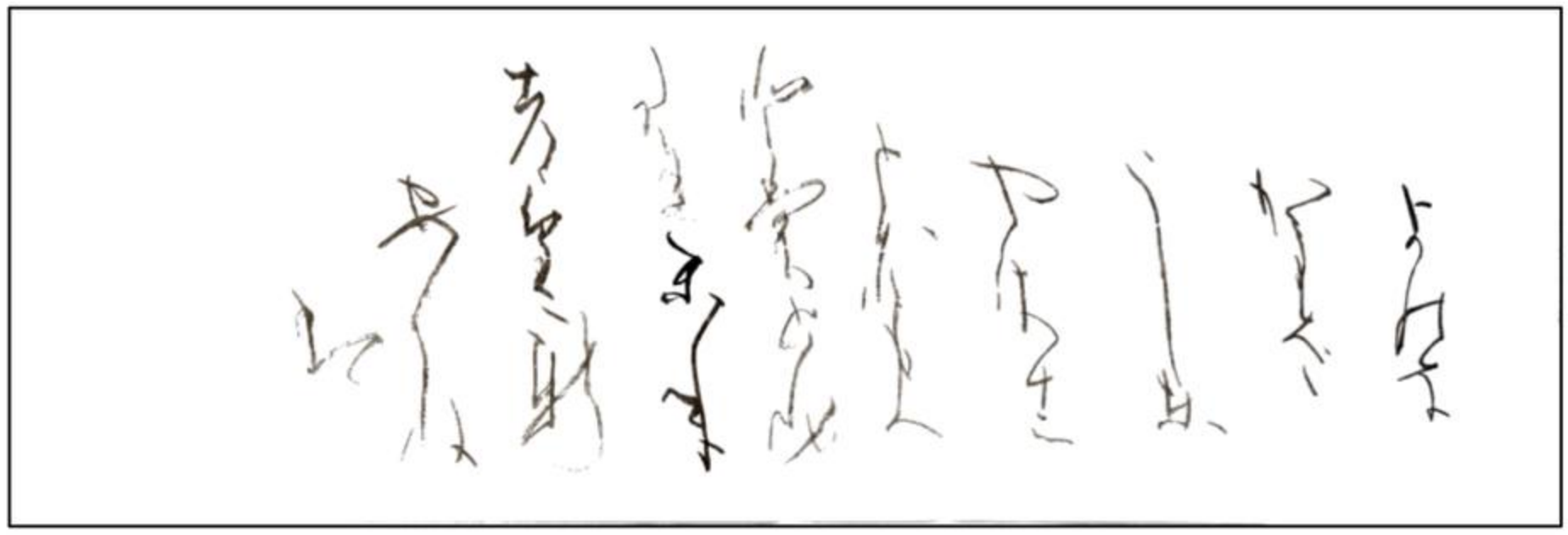


62

寶官紗紀　三回生
臨書　行書　小野道風『屏風土代』　巻子

「尋春花　見説林花処々開、晨興並馬共尋来。青糸滲出陶門柳、白玉装成庚嶺梅。…」前回に引き続き今回も、小野道風の書を臨書しました。ファンなのです。にも関わらず練習不足なのが悔やまれますが、今まで臨書に挑戦してきた中で一番楽しく書けた気がしています。やっぱり日本の書家さんのどこか柔らかい感じがすごく好きです。ご批評の程よろしくお願いします。





63

眞嶋優一　二回生
創作　かな　『よのなかの』
二尺×六尺

「世の中を　憂しと恥しと　思へども　飛び立ちかねつ　鳥にしあらねば」

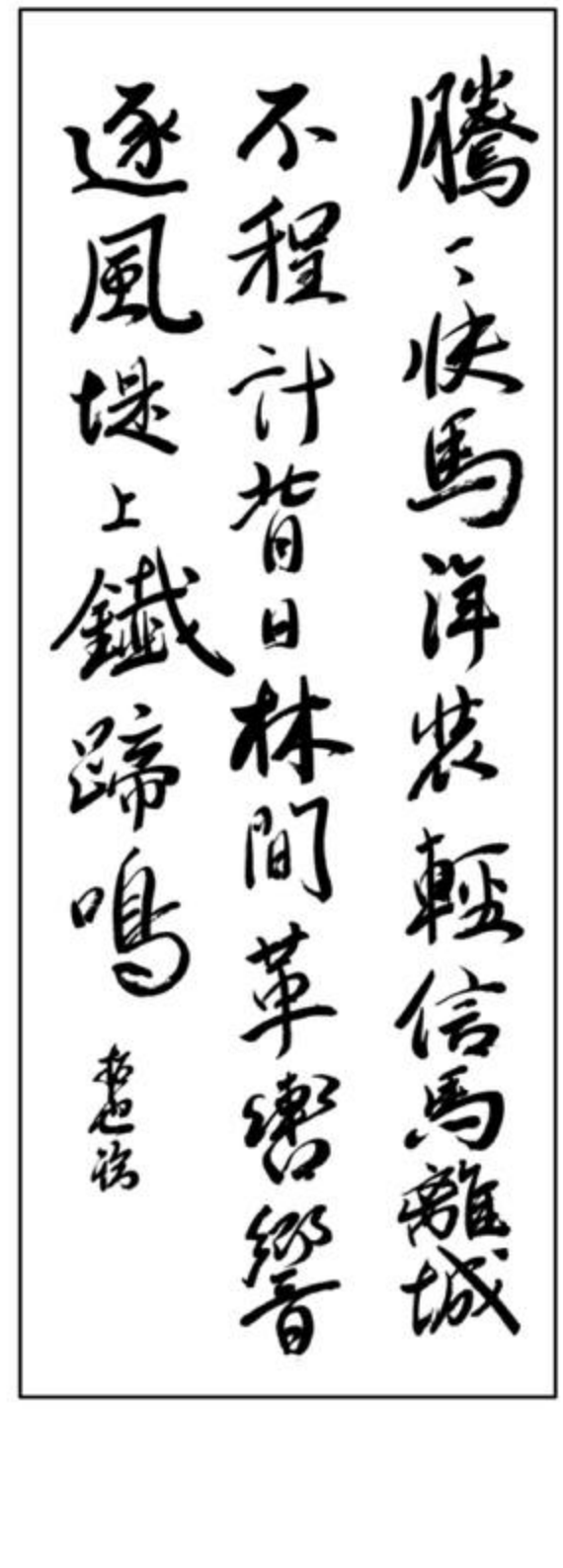
万葉集のなかで山上憶良が詠んだ歌です。生きていれば誰でもつらいことや悲しいことはあると思います。どうにもならない…いっそ遠くに飛んで行きたい…この歌を詠んだ当時の憶良の心情と、今の自分の心境に重なるところがありました。今回はそんな心境の一端を込めた思いを感じて頂けたらと思います。

64

宮下拓也　四回生
臨書　行書　佐久間象山『七言絶句』　全紙

「騰々快馬洋装軽　信馬離城不程計　背日林間革轡響　逐風堤上鐵蹄鳴」

幕末の人物を文字から知りたいと思い選びました、そこから時代が垣間見えたらいいなという無理な希望を抱きつつ。漢文が読めたらもう少し彼らを理解できたのでしょうか…。



65

宮部大志　二回生
臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「藏我為最雄譬猶満月麗天蛍光列宿」

下手なりに頑張りました。もっと筆を華麗に使いこなせる人間になりたいです。



66

家倉凌　四回生

臨書　かな　筆者多数『筆林』

額

「さくらばな 咲にし日より よしの山 そらも ひとつに かほるしらくも」 他

手鑑（主に江戸時代に作られた、鑑賞のため古筆を収集しまとめたもの）のひとつであるから、ぽつぽつと選んで書きました。



67

矢野凱己　二回生

創作　かな　『ありあけの』

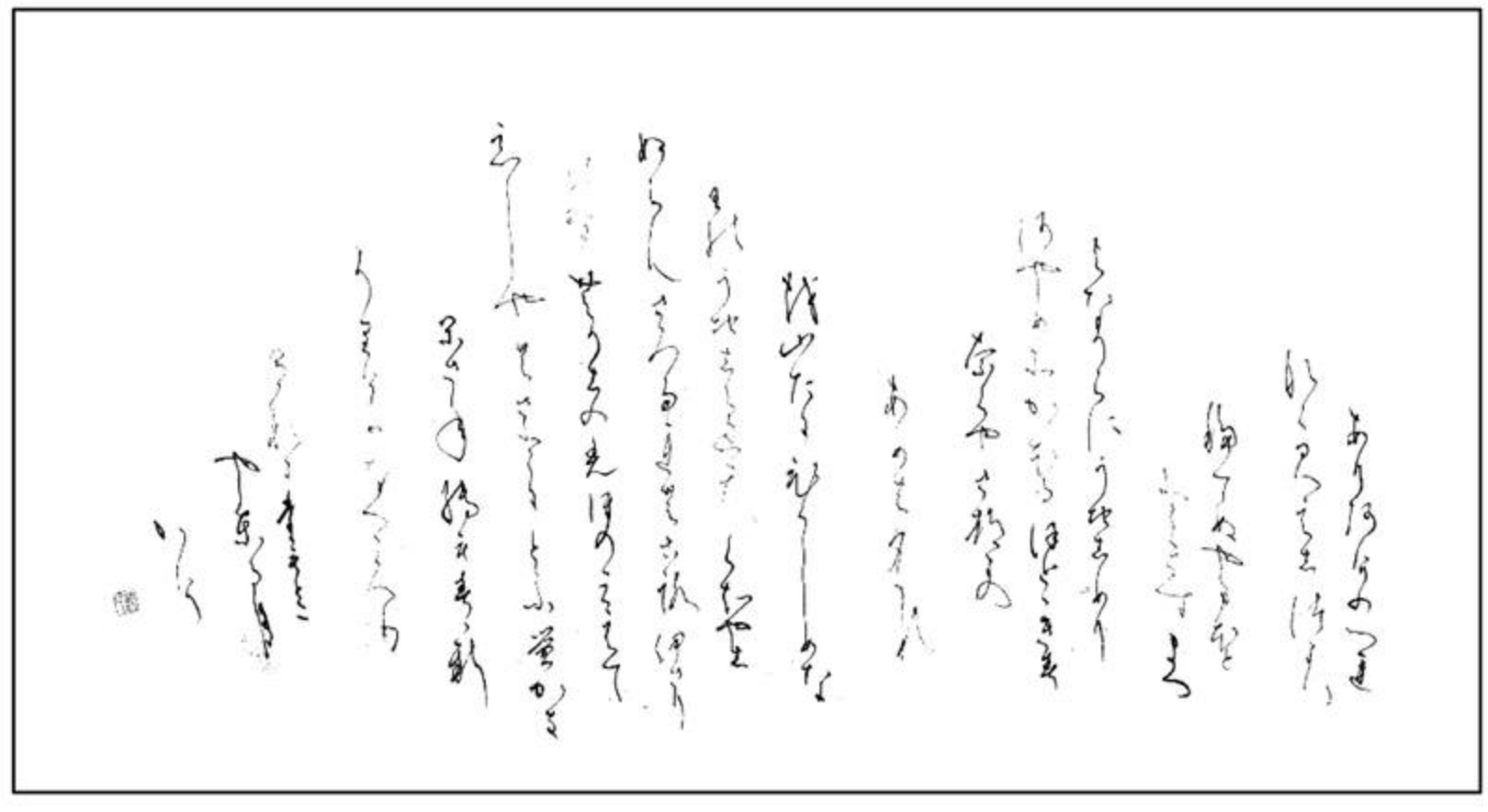
「ありあ(阿)け(介)のつれ(連)な(那)くみ(見)えし(志)つ(徒)き(支)は(八)い(移)でぬやま(万)ほ(本)と と(登)ぎす(須)まつよ(与)なが(可)らに」

他四首

はじめて仮名の創作をしました。あまりよく分からないまま構成など決めて書き始めましたが、それなりに満足のいく作品にはできました。

仮名のもつ繊細な美しさが表現できていればと思います。

半懐紙三枚継



68

山﨑絢香　三回生

臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切

「名無翼風長飛道無根而永固流慶歴遂古鎮常」

若木のようにしなやかで美しい線が、心を捉えて放してくれません。雁塔は線が細すぎて作品にすると見栄えがしない、と言われるそうですが、「太くしてこの曲線美を譲りなど絶対にしないわ」と思い表現の仕方を模索しました。とても難しいけどそれもまた魅力的。



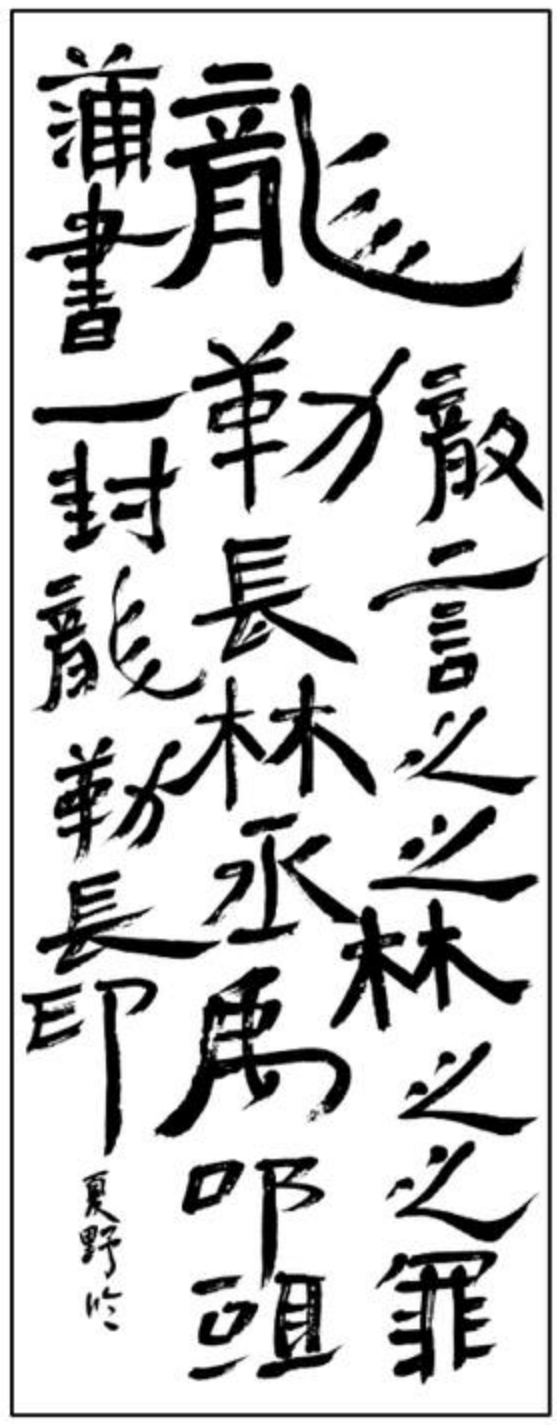
69

山崎夏野　三回生

臨書　隷書　『木簡』　聯落

「敢言之之林之之罪　龍勒長林丞禹叩頭　簿書一封龍勒長印」

今まで書いてきたものとは全く違う雰囲気を持つ、木簡に挑戦しました。生き生きとした線が出せるように頑張りました。



70

山﨑絢香　三回生

創作　行草書　『嘒彼小星維參與昴』　半切

「嘒彼小星維參與昴」

微かに光るあの小さな星はからすき星とすばる星。実はこの詩、妾を小星に例えて彼女らの悲哀をうたったものなのだそうです。そんなことも知らず、梅雨が明けたら天体観測に出かけたいな、なんて考えながら自由気ままに書いてしまいました。



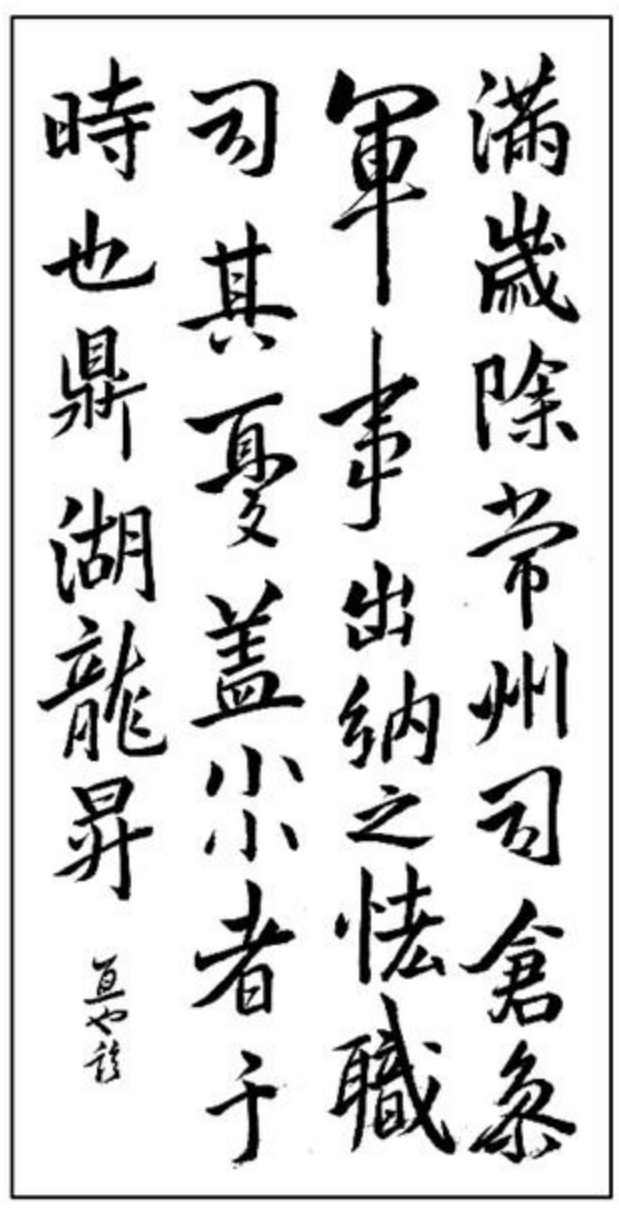
71

山科直也　二回生

臨書　行書　李邕『李思訓碑』　全紙

「満歳除常州司倉参軍事出納之恪職司其憂蓋小小者于時也鼎湖龍昇」

今回は李邕の李思訓碑の臨書をしました。この作品は線が太めでないにもかかわらず、力強さを感じさせ、また筆の勢いもあり面白そうだったから選びました。これらの要素はまだ十分出し切れていないかもしれません。ご指摘などがございましたらどうぞよろしくお願いします。



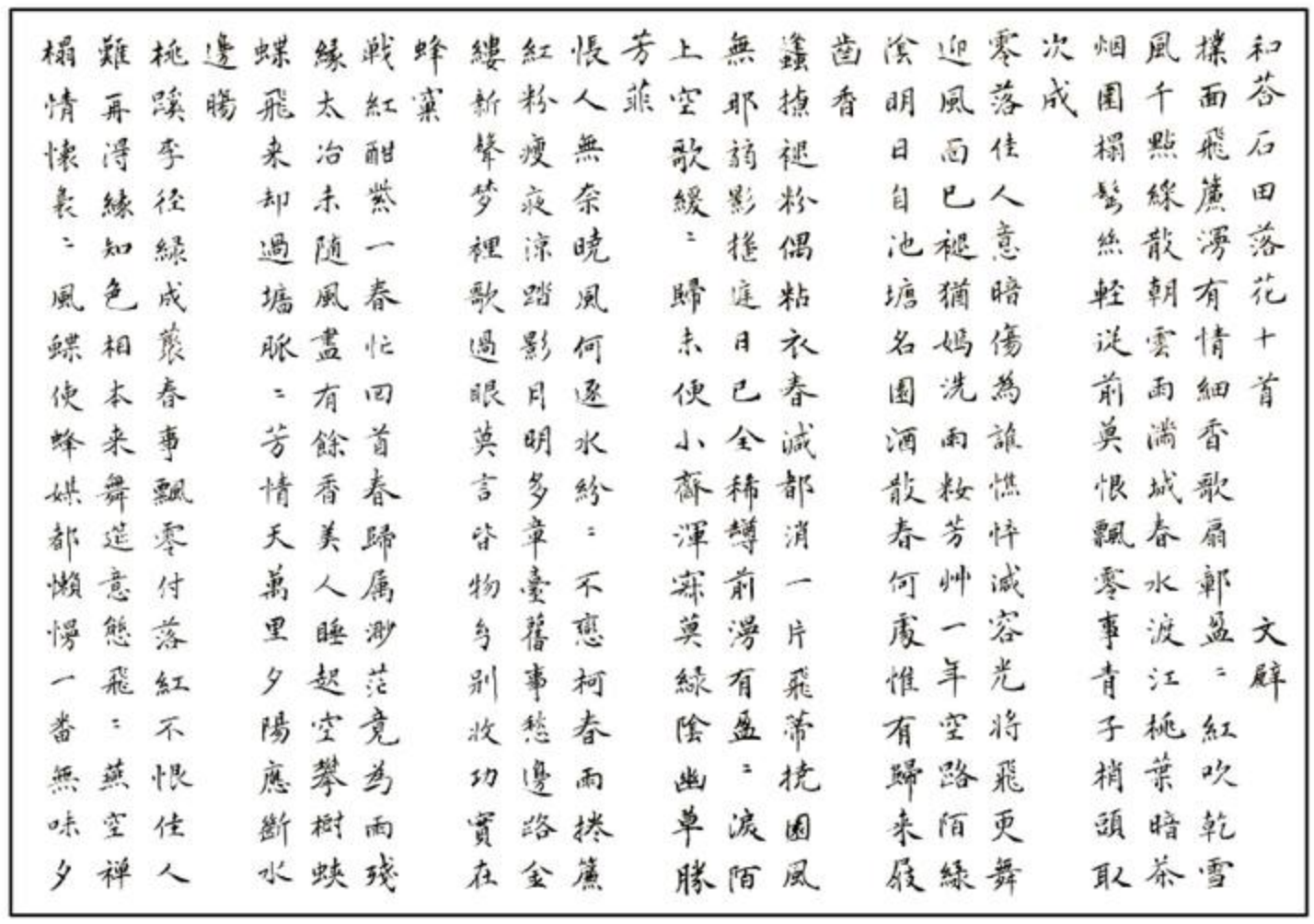
72

吉村友希　三回生

臨書　楷書　文徴明『細楷落花詩巻』　巻子

「和答石田落花十首　文璧　撲面飛簾漫有情細香歌扇鄒盈々紅吹乾雪風千點緑散朝雲雨滿城春水渡江桃葉暗茶烟園榻鬢絲軽従前莫恨飄零事青子梢頭取次成…」

何か一つは多字数の作品を出したいという気持ちが抑えきれず、以前から興味のあった細字に取り組みました。思った以上に普段の自分の字の癖が表れたり、繊細で柔らかい始筆や払いが表現できなかったりと苦労の連続でしたが、半紙一枚ずつ仕上げていく達成感が何とも言えず、ここまで書き続けてしまいました。


和答石田落花十首　文璧
撲面飛簾漫有情細香歌扇鄒盈〻紅吹乾雪
風千點緑散朝雲雨滿城春水渡江桃葉暗茶
烟園榻鬢絲軽従前莫恨飄零事青子梢頭取
次成
零落佳人意暗傷為誰憔悴減容光将飛更舞
迎風面已褪猶嫣洗雨粧芳艸一年空路陌緑
深明日自池塘名園酒散春何處惟有歸来殿
茵香
蠭擾褪粉偶粘衣春減都消一片飛蒂挽園風
無那翦影趁庭日已全稀薄前湯有盈〻淚陌
上空歌緩〻歸未便小齋渾寂寞緑陰幽草勝
芳菲
恨人無奈暁風何逐水紛〻不忍柯春雨拷薫
紅粉瘦疲涼踏影月明多章臺舊事愁邊路金
縷新聲夢裡歌過眼莫言皆物外別收功實在
蜂窠
戦紅酣熳一春忙回首春歸属渺茫竟為雨殘
緑太冶未随風盡有餘香美人睡起空攀樹蛺
蝶飛来却過塘脈〻芳情天萬里夕陽應斷水
邊腸
桃蹊李徑緑成叢春事飄零付落紅不恨佳人
顔色相本来舞遠意態飛〻燕空禅
難再得縁知色〻風蝶使蜂媒都懶惰一番無味夕

縦 1091mm×横 788mm

73

二回生合作

創作　『学生川柳グランプリ』

書道部二回生が、学生生活の悲哀やあるあるなどを五七五で表現してみました。果たしてどの作品がグランプリに選ばれるのでしょうか…

皆様、ぜひ投票をお願いします！

—部員紹介—

顧問 京都大学大学院 人間・環境学研究科 教授 阿辻哲次先生

技術顧問 日展会友・書道家 寺本蒼玄先生

一回生

工 阿部朱夏
工 井上誠也
医 今村朱里
法 上村香鈴
総人 内山拓喜
医 浦川真由子
工 江里口拓哉
法 小野日菜乃
工 郡健一郎
経済 小﨑美結
法 米田景
教育 小栁亜季
工 近藤泰仁
文 佐武千寛
文 清水隆史
農 杉本舞
工 角裕介
理 善野和人
文 橘大輝
工 ダン・ヴィエット・チュン
法 徳田寛生
文 中村直樹
工 橋詰都
工 原田拓実
理 原誠人
法 前山隼人
農 松尾和輝
工 間宮基貴
農 山中希恵

二回生

医 岡本晴香
工 奥田祐司
経済 笠原知生
法 川口功
法 川根みゆき
府医 木高早紀
農 木下有羽
法 清水麻友美
医 下坂桃代
薬 竹内春佳
理 田島正規
医 立田俊也
工 趙詩園
工 津金澤秀行
医 中祐汰郎
総人 深谷拓未
農 堀場菜摘
造形 眞嶋優一
法 三村祐貴子
工 宮部大志
工 矢野凱己
工 山口和樹
農 山崎夏野
工 山科直也
工 渡辺顕

三回生

農 新井一矢
薬 荒巻拓哉
工 石川敬一
理 上西隆太
工 牛山泰喜
工 上井晴仁
工 閻姝恒
工 角谷遊野
総人 加藤大智
農 釜阪紘平
工 藏岡凌平
文 篠原理那
光華 島津七明
工 白谷暢浩
工 宗哲仁
工 惣塚勝也
文 瀧川光美
理 武田桃子
法 徳川鈴奈
教育 硲健太
理 疋田研一郎
農 古川智大
法 寶官紗紀
農 松下有菜
法 山﨑絢香
医 山下燎亮
総人 山脇謙
文 吉村友希

四回生

工 飯岡達也
農 稲葉由花利
理 上村耕平
工 王雋齐
法 大石龍太
工 岡本悠
農 片野裕太
工 河合翼
法 北堀雄大
法 小島健史
工 石博昭
法 高橋侑生
工 チャンドゥク・クァン
法 戸高郁穂
農 中谷百花
法 中野綾香
理 東村智佳
工 藤田雄也
農 松澤祐実
文 宮下拓也
農 家倉凌
経済 山野敬子

五回生

総人 平野泰隆

修士一回生

理 伊東優治
法 大泉陽輔
医 川上澄香
工 小松聡子
情報 鈴木貴也
人環 陳巧香
農 寺西幸
工 藤井結稀
工 山本大翔
薬 渡辺健介

修士二回生

工 大庭諒介
工 奥山優
工 小野愛美
農 鈴木新人
工 時藤大典
情報 アルセーニ, トルマチョブ
農 前渋奈央子
医 山口萌

修士三回生

農 尾崎由布子
工 永溝聡士

留学生

造形 レガロンペラヨ, シルヴィア

掛軸 文房四宝 和紙の店 書楽

〒605-0012 京都市東山区東山三条東入南側
TEL.075-762-2330／FAX.075-751-6571
syoraku@aioros.ocn.ne.jp
〈日曜・祝日定休〉

Calligraphic Item Specialty Store 書遊 検索
篆刻用品・書道用品・額・軸装はお任せください。
書遊
http://www.syoyu-e.com/
AM.10:00－PM.6:00

奈良本店 駐車場完備
奈良市今辻子町37
TEL0742-23-5547
FAX0742-20-2261

大阪店 駐車場あり
大阪市福島区福島5-14-6クレセントビル2F
TEL06-6458-8808
FAX06-6456-4077

京都店
京都市中京区高倉通三条下る丸屋町164
TEL075-251-7800
FAX075-251-7802

新潟営業所
TEL 025-374-5510
FAX 025-374-5511

姉妹店 札幌アメミヤ
札幌市中央区南一条西2丁目5南一条Kビル5F
TEL011-398-9400
FAX011-398-9401

筆・墨・硯・書画用紙・色紙短冊・日本画用具
株式会社 松楳園
〒600-8075 京都市下京区柳馬場通仏光寺下ル
TEL（075）351－6380(代)
FAX（075）361－8006
http://www.shoubaien.co.jp.

香/筆/和風文具/香道具/茶道具
鳩居堂
〒604-8091 京都市中京区寺町姉小路上ル下本能寺前町520
営業時間 10～18時 定休日(日曜日)
TEL. 075(231)0510 FAX. 075(221)5987
地下鉄東西線市役所前駅下車5番出口
http://www.kyukyodo.co.jp

京筆・京文房
りゅうしどう
龍楊堂
京都 〒604-0916 京都市中京区寺町通二条上ル
TEL.075-252-4120 FAX.075-252-0006
東京 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋四丁目六の二
東洋美術印刷本社ビル一階
TEL.03-3239-0733 FAX.03-3239-0731

文具四寶（筆・墨・硯・紙）和紙工芸品 書画作品
書芸サロン 賛交
二条店 〒604-0931 京都市中京区二条通河原町西入北側
TEL・FAX：075-222-0390
E-mail：info@shoga-sankou.co.jp
株式会社 賛交社 本社 〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町27
TEL：075-572-8964／FAX：075-572-8905

かな料紙・京染和紙
加工紙・画仙紙・半紙他
書道用和紙の専門店
紙の津久間
京都市下京区新町通花屋町下ル
TEL（075）371－8186（代）
FAX（075）371－8189

墨筆硯紙 書道用品一式
京都 古梅園
〒604-0916
京都市中京区寺町二条上る
TEL（075）231－1531
FAX（075）231－0272

京都大学書道部　平成 27 年度　第 115 回

初夏書展　―書展パンフレット―

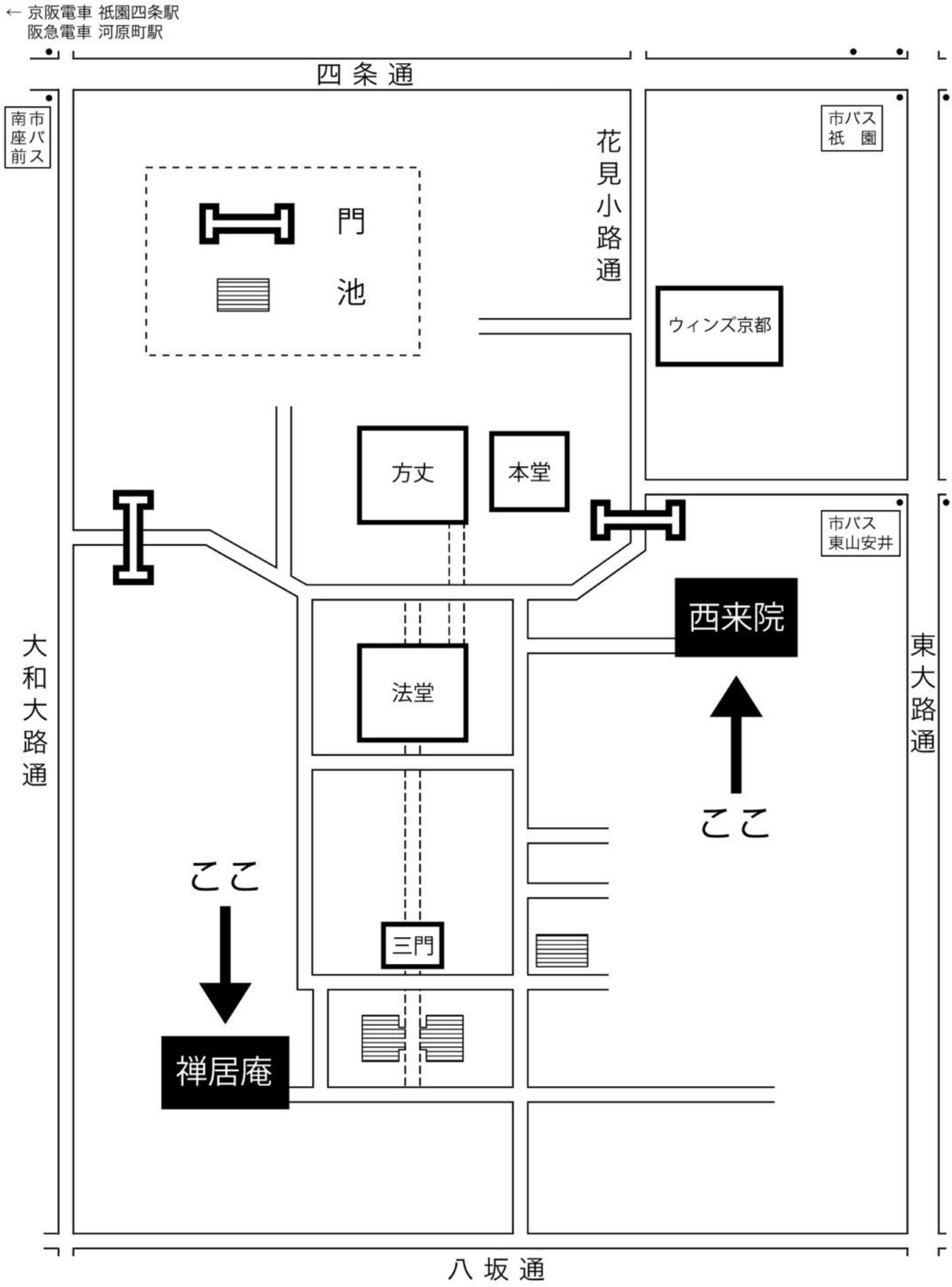
●発行　：京都大学書道部
●編集者：京都大学書道部平成 26 年度パンフ係
新井　一矢（農学部 3 回）
荒巻　拓哉（薬学部 3 回）
加藤　大智（総合人間学部 3 回）
藏岡　凌平（工学部 3 回）
●発行日：2015 年 6 月 6 日
●印刷　：大阪コピー

□京都大学書道部□

〒606-8317
京都市左京区吉田本町
URL　：http://kshodobu.sakura.ne.jp/
E-mail：info@kshodobu.sakura.ne.jp
代表　：宗　哲仁（工学部 3 回）

Printed in Japan.　　©京都大学書道部　2015

—建仁寺案内図・周辺地図—


← 京阪電車 祇園四条駅
阪急電車 河原町駅
四条通
南座前 市バス
花見小路通
市バス 祇園
門
池
ウィンズ京都
方丈
本堂
市バス 東山安井
西来院
ここ
法堂
三門
ここ
禅居庵
大和大路通
東大路通
八坂通



This book was
made by the LeME